
一人のセカイ

月見 岳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一人のセカイ

【Nコード】

N52000

【作者名】

月見 岳

【あらすじ】

長澤 優希は一人の世界に居るのが好きだ。だから他人を寄せ付けず、いつも一人で居る。そんな事もあり、高校入学2ヶ月で早くも孤立して浮いた存在になってしまった。今では、クラス全体で無視されるイジメ状態だ。ある時、優希に積極的に関わろうとしている物好きな娘に、帰りに一緒に寄り道をしてくれと頼まれて、その娘と一緒に帰ることになる。そこから、何かが変わり始めた。ある素直じゃないひねくれ者のお話。

一話（前書き）

誤字脱字多数。気にしないでね。

一話

テレビを観ては思うことがある。

ああ、もう別次元に生きているんだな……。

昔、いつも無駄に振りまいていた笑顔は、今やとても遠い存在となつてしまった。

運という要素もあるだろうが……それは、彼女が頑張った結果の証であり、それに見合う舞台が用意されただけ。それだけ。

その活躍を喜ばしく思う反面、昔の事を少し思い出しては、寂しく思ってしまうのだ。

同じ時を歩みながら、全くの違う世界に行ってしまった。近くて遠い異世界に……。

だから、僕は……。

●

「なあ、長澤」

昼休み。そう馴れ馴れしく僕に声をかけてきたのは、同じクラスの男子だった。

「……なに」

「実はさ、少し聞きたいことがあるんだけどさあ」

内心、またかため息をつく。ニヤニヤと嫌らしい笑顔を浮かべる目の前の男子が非常に胸くそ悪い。

どうせ、次に言う言葉くらい簡単に予想がつく。

「お前、あのアイドルの佐山 夏帆とは幼なじみだって本当か？」

やっぱりか。

耳元で小さくそう囁いてくる言葉に辟易する。

ええい、肩を組んでくるな。馴れ馴れしい。

「……そうだけど、それがどうしたって言うのさ」

「いやあゝ、是非とも紹介してくれないかと」

「嫌だ」

ハッキリと拒否の姿勢を示した。こういう輩はしつこく、そして陰湿なんだ。

「いいじゃないか。友達のよしみでさ」

いつの間に友達になったのだろうか。

今までそんな素振りすらなかったではないか。寧ろ、クラスメイトに呼応する形で、僕を無視する姿勢ではなかったか。

どうせ、アイドル佐山 夏帆との関係を知って、自分も関係を持ちたくて取り繕ってきたんだろう。

その凶々しくも見え透いたゲスい下心には怒りすら覚える。

何が友達だ。ただのパイプに過ぎないんだろうが！

「止めてくれる。いきなり友達面するの。下心が見え見えだよ」

「なっ！」

「そういうことだから」

そう言つて、僕はその場から立ち去つた。

後ろから舌打ちとクソが！というテンプレートな捨て台詞が聞こえた。

なに、よくあることだ。

●

僕には友達と言える存在が少ない。

いや……正しくはないだ。

もとより、独りを好む孤立主義だったし、社交的でもない。だから、友達という存在を求めたこともない。

よく、人間は一人では生きていけないなんていうけど、それは今の社会体系が、経済的にそうであるというだけで、人間個体としての社会的、精神的、肉体的といった点では一人で生きていけると考えている。孤独死や、戸籍記録問題。人関との関係を断ち、一人死んでいく。これこそいい例だろう。

まあ、何が言いたいかつて言えば、僕の周りには人がいないってことだ。

簡潔に言えば避けられている。

無視というイジメだろう。

そう、クラスではないような存在として扱われている。

だけど苦痛ではない。寧ろ家にいるよりは快適だ。

僕がDMだからという訳でないことを言っておく。だれにも邪魔されないからだ。

しかしながら、こんな僕でも部活というものには所属している。面

倒なことに、我が校では部活所属が絶対なのだ。

ガラリと開けたその部屋は、文芸部の部室。

僕は文芸部に所属している。

誰もいない部室に入ると、窓の片側だけにカーテンを走らせる。日を遮り、影を作ったところにパイプ椅子を持ってきて、座って静かに本を読み出す。

静かな部室。

この文芸部の部員は、殆どが幽霊部員。来た試しがない。

運動部の声、プラスバンドや軽音部の少々ズレた音楽をBGMに、小説を読みふける。

何という楽園。

あんな子供じみたクラスメイト共や、暴君な両親に糞で下劣な兄貴がいないこの空間は、世界に唯一の癒やしの空間だった。

しかしながら、幽霊部員が殆どのこの文芸部にも例外というのがいる訳で……。

「やつ、長澤！」

入ってきたのは一人の女子。

文芸部というより陸上部といった感じの、ショートカットで活発そうな彼女は長谷部 深春。

その印象通り、本を読むより体を動かす方が好きな体育会系である。何故、文芸部に入部したのかは知らない。知りたくもない。

ただ、こうも簡単に崩れてしまった楽園が残念で仕方がなかった。

「溜め息なんか吐いちゃって、幸せが逃げちゃうよ？」

お前の所為だよ。とは言えず、背中をバシバシと叩かれる。痛い。

「では、僕はこれで帰るから」

帰っても良いことはないけど、この壊された樂園なんかに住たって何にもならない。

「あれ？帰るの？」

「……………」

その疑問に僕は何も語らず、部室を出た。
長谷部も同様に部室出る。

「ねえ、帰るんなら寄り道しない？いい喫茶店見つけたんだ」

「どうぞ。お一人で言ってください」

「寂しいじゃない」

そうだろうか。ゆっくり出来るじゃないか。
一人でいるのは寂しいことなのだろうか。

「一人は寂しいですか？」

「うん、寂しい」

「そうですか。僕は落ち着きます。だから一人が好きです」

———です、僕を放っておいてください。

そういうと、長谷部は目を丸くして驚いていた。
まるで信じられないようなものを見たか、珍獣でも見たかのような
リアクションに少しカチンときた。

「何ですか。ポカンとして」

「本当、寂しい人だって」

「……失礼ですね。あなた」

僕が寂しい？

全く、失礼だ。笑わせてくれる。

実際には笑わないけど。

「あのさ、もしかして私と居るのも……嫌？」

「もしかしくなくても嫌です」

隠したりオブラートに包まず、バッサリ言い捨てる。

「あはは……そっかあ、ちょっとショックだな」

長谷部は少し影の差した笑顔を浮かべた。

「でも……うん。じゃあさ、私と居るのを嫌って言わせないようにするよ」

その強引さに、少し頭が痛くなってきた。

「……だから、僕は一人で居たいんです。放っておいてください」
「嫌」

ああもう！この人は！

「放っておけないよ。一人でいるほうが幸せなんて……寂しすぎる」

勝手に人の幸せを決めるな！

人の幸せを不幸とするな！

僕を憐れむな！

心の中で叫ぶ。

だから、こういう善人ぶった人は嫌いなんだ。
人の心を土足で汚していく。その癖、自分は救世主と勘違いする。
自分の行いに陶醉する厄介者だ。

「あなたは自分が幸せだと思ったことを押し付けているだけです。
それが相手にとって幸せとは限らないことに気付かないのですか」

「それは……！」

「あなたはただの独善者です」

長谷部はその場で立ち尽くし、悔しそうに下唇を噛んだ。

その姿を一瞥して、僕は一人帰ろうとした。

しかし、制服の袖を掴まれて動けなかった。

「まだなにか？」

俯いて僕の袖を掴む長谷部は、らしくないほどにしおらしくなっていた。

「君に独善者と思われるでもいい。だから、お願いだ。今日は私と少し寄り道して……。嫌ならすぐに帰ってくれてもいい。だから、お願い……」

本来の僕なら、どんな状況だったとしても嫌だと断って、関わりを持たなかっただろう。

でも、この時は何かが違っていた。らしくない長谷部のしおらしい姿を見たからかもしれない。

「……少しだけです。すぐ帰りますから」

僕はOKしてしまったのだ。

一話（後書き）

ごめんなさい。

誤字脱字多数でごめんなさい。

もう一つの連載どうしやがったというのは無しでお願いします。
全10話予定です。

どうなるか分かりません。

何分、不定期更新ですので……。

一話（前書き）

誤字脱字？そんなのKAN慧音！

二話

一人で帰らない放課後というのは久し振りだった。

小学生以来かもしれない。

僕は、長谷部と並んで歩いていた。

いや、正しくは長谷部が歩く三步後ろを、僕は歩いていた。

「もうすぐだよ。この先の路地を右に入ったところ」

「……そう」

結局のところ、僕は長谷部の寄り道について行くことになったけど、すぐに帰るつもりでいた。

路地を右に入ると、そこには一件の古びた……良く言えばレトロな喫茶店が見えた。

メビウスリングと書かれた看板と、あるゲームで見たことがあるような、メビウスの輪のリボンの絵。

何となく、店主の趣味が分かった気がした。

「どうしての。早く入ってよ」

「あ、うん」

店の中には客はおらず、ギターとハーモニカの音楽が流れていた。話し声すらない。そして、カウンターに立つマスターらしき人は、いらっしやいませとすら言わず、黙々とグラスを拭いていた。

寡黙……にしては度が過ぎている気がする。

長谷部に連れられ、勝手にテーブルに着くとメニューを開く。

どこにでもあるようなメニュー内容だった。料金だって、少し安いぐらいだ。

「すみません。珈琲とケーキセット、チョコレートケーキで。長澤はどうする？」

「えっと、ミルクティーとケーキセット、モンブランで」

「以上です」

マスターが静かに頷いた。

これでいいのか、このお店。

「ふふ、面白い喫茶店でしょ」

「……否定はしない」

「静かだし、雰囲気いいし、何より誰にも邪魔されることがない。長澤好みでしょ、このお店」

「ん、まあね。こういう所はないから」

どうしても、この辺りの飲食店は、うちの生徒が沢山いたり、主婦の世間話があったり、静かな店がなかった。

このお店はかなりの穴場だろう。

この静かすぎる空間が、他の人には堅苦しいのかもしれない。

「なかなかいい所だね」

「喜んでくれて良かったよ」

長谷部は朗らかな笑みを浮かべた。

自分一人だけならなお良かったとは言わなかった。

その辺のTPOは僕だって弁えているし、何故だか今は長谷部のことが邪魔だとか思わなかった。

「さて……」

昨日買った小説を、鞆に入れたまま読んでいないことを思い出して取り出した。

こうした場所ならゆっくりと落ち着いて読めそうだ。

「何それ」

「昨日買った小説です」

「今読むの？」

「当たり前です。こうゆっくりできる時間は貴重ですから」

「別に今じゃなくても……といか分厚いなあ」

「そうですか。これぐらい普通ですが」

「よく読めるね。私なんか、10ページで眠くなるもん」

「……じゃあ、なんで文芸部に入ったんですか」

「えっと、あはは……」

長谷部が罰が悪そうに笑っていると、テーブルに静かに二種類のケーキと珈琲、そしてミルクティーが置かれた。

そして、伝票を置いて、一言も発することなくマスターは奥に消えていった。

「ん〜っ、おいし」

早速、長谷部はケーキに手を着けていた。

頬に手を当て、だらしない表情でフォークを喰わえていた。

しばらくの間は長谷部は静かになって僕の邪魔にはならないだろう。

僕は一口ミルクティーを口に含み、小説を読み始めた。

●

ふと気がつけば、一時間という時が流れていた。

注文したミルクティーは残りが冷たくなり、モンブランはすでに無

くなつた。

「ああ、もうこんな時間ですか……」

冷たくなつたミルクティーの残りを飲み干し、小説本にしおりを挟んで鞆にしまう。

「……あ」

向かいを見ると、長谷部が机に突つ伏して眠っていた。あまりにも無防備なその姿に、少し見とれてしまったのは秘密である。

長谷部の性格上、ケーキを食べ終わったら、無理にでも僕と会話をしようとすると思っていた。

もしかして、僕は本に集中しすぎて気付かなかったのだろうか。それとも、長谷部が僕に気を効かしてくれたのだろうか。

「……長谷部、起きて」

僕は、長谷部の耳元で囁き、体を揺すった。

「長谷部」

「……うん、ああ、おはよう」

「おはよう」

「で、おはようのチューは？」

どうやら、寝ぼけているらしい。

頭をひっぱたいてやった。

顔が熱いのは、きっと風を引いたからだ。

「……痛い」

「目が覚めた？」

「そんな……優希との甘い新婚生活が夢だったなんて……」

なんて恐ろしい夢を見てくれているんだこの人は。

僕と長谷部が……ない。有り得ない。

「そろそろ帰りたいんだけど」

「……ん、あ、もうこんな時間なんだ。じゃあ出ようか」

僕はコクリと頷いた。

レジで清算を済ますと（この時もマスターは一言も言葉を発さず、レジに表情された金額を指差しただけだった）店を出て、長谷部の三步後ろを歩く。

「気を使ってくれたんですか」

「えっ……」

あまりに唐突すぎただろうか。

「暇じゃなかったんですか。寝てましたし」

「まあ、暇と言えば暇だったけど」

「だったら、気を使わなくて良かったんですけど」

長谷部はかくんと首を傾げた。

「それって、本を読んでも長澤に話しかけて良かったってこと？」

「いえ、帰ってくれて良かったということです」

流石に、本を読んでいる時に邪魔されたら怒るかもしれない。

「私が連れてきたんだし、放ってなんかおけないよ」

それに——と続けて、長谷部は嫌らしくニヤリと笑った。

「私は確かに暇だったけど、本を読む君の愛らしい姿を眺めていると、なかなか楽しめたよ」

「——なっ！」

何を言っているんだこの人は！

ひ、人の姿を、あ、愛らしいなど！

第一、僕は男であって、愛らしいなど言われても嬉しくはない。寧ろ恥ずかしい。

火照った頬が熱い。

「ふふ、長澤がそうやって慌てる姿は初めて見るね」

「き、君は僕をからかっているね」

「からかっているつもりはないよ」

ニヤニヤと笑みを浮かべる長谷部の顔が憎たらしい。

「ところで、長澤はどうだったかな？」

「……なにが」

「一人で居る時と私と一緒に居る時、どっちが良かったかな？」

「一人でいるほうが良かったです！」

からかわれて恥ずかしい思いをすることもないし、落ち着いてやりたいことをやることができる。

「そっか……」

長谷部が悲しそうな表情を浮かべた。

でも……長谷部と一緒に居て、悪い気はしなかった。寧ろ、一人の時とは違うポカポカと温かい気分になって心地よかった。

今日の日差しが暖かいのもあるかもしれない。でも、一人の時に浴びた日差しの暖かさと違って、体の中から温まるようだった。だから、長谷部と一緒にいるのは、悪くはないかなって思う。

「ですが、こうやって一緒にのんびりするのも悪くはないかなって思いました」

「……えっ」

「ですから、今回はありがとうございました」

僕は長谷部にお礼を言う。

お世話とかじゃなく、心からそう思う。

こういう気持ちになったのはしばらくだと思う。何だか、冷たいものがずっと融けたようだった。

「……やっと、笑ってくれたね」

長谷部の呟きに、えっと言うしかなかった。

「気付かなかった？長澤、高校に入ってから一度も笑ったことがないんだよ」

「……」

それは気付いていた。

長谷部は知らないだろうが、実際は中学時代から笑ったことがない。お笑い番組を観ても呆れるだけ、同年代の人間と話しても、その稚拙さに辟易するだけ。

家庭の事情もあいまって、笑うことはなくなっていた。

「君を笑顔にしたかった。だけど君は私を追い払い続けた。それでも私は諦めなかった。2ヶ月も掛かったけど、ついに私は……君の笑顔に出来た」

「もしかして、文芸部に入部したのも……」

「長澤の笑顔がみたいから」

呆然とするしかなかった。

長谷部にだって、入りたかった部活くらいあったはずだ。それを、ただ僕を笑顔に……笑顔が見たいからって、文芸部に入るなんて。

「……馬鹿じゃないですか」

「確かに馬鹿かもね」

「ええ、馬鹿です。大馬鹿者です。あなたにも入りたい部活くらいあったでしょう。それを、僕の笑顔が見たいからって……本当馬鹿です」

目から熱いものがこみ上げてきそうになるのを我慢する。

もし、長谷部にバレたら、あの嫌らしく憎たらしいニヤニヤ顔をしてくるのは間違いない。

「おやおや、もしかして泣いているのかな。かなかな?」

ああ、本当にこの人は目ざとい。

僕は目を服の袖でこすりつける。

「泣いてません。目にゴミが入って痛いだけです」

「そう?」

僕がそう言っても、きつと長谷部は見透かしているんだと思う。それでいて、踏み込まず何も言ってこない。その絶妙な距離感。僕が抱いていた長谷部の印象なら、躊躇無く入り込んで来ると思っていた。

押して駄目なら強引に押せのような人間だから。

こうやって、引くこと事態、長谷部らしくない。

「……らしくないですね」

「そうかな？」

「ええ、遠慮がない図々しい人ですから、もつとからかってくると思っていました」

「そ、そんな言わなくてもいいんじゃないかな。そりゃ、私にだってその自覚はあるし、一応淑やかになれるように頑張っているんだけど」

「……自覚はあったんですね」

だからだろう。

自分の欠点を正すために、長谷部は淑やかにしようとした。その結果、深いところまで踏み入れないようになった。

でも、長谷部のその……良く言えば姉御肌な性格は、僕は美点だと思ふ。

「でも、僕は別に無理をしなくてもいいと思います」

「えっ」

「その……長谷部の押しの強さとか、姉御肌なのは僕は嫌いじゃないです……」

言ってみて恥ずかしかった。

「えっ、あ、その——っ！」

言われた方も恥ずかしいようで……。

赤面して、おろおろとしている。

人がいないとはいえ、往來のど真ん中で僕は何をやっているんだろう。

「……………」

「……………」

あああつーらしくない！らしくないぞ僕！

この無言の空気が気恥ずかしい。恥ずかしすぎる！

「……じゃあ、このままでいっかなあ。男勝りだとか母さんに怒られるかもしれないけど」

そう言つて、長谷部が見せた笑顔は、ちよっぴり頬が赤く染まっているように見えた。

「いいんじゃないですか。婚期が遅れるかもしれないですけど」

「そうになったら貰ってくれる？」

「謹んでお断りさせていただきます」

長谷部ならもつといい人が見つかるはずだ。

しかし、僕の思いとは裏腹に、長谷部は違つようになってしまうようだった。

「……絶対に貰ってもらふ。責任とつてよ」

「うえっ！？」

固い決意表明だった。

これは、もしかして婚約ということになるのか？
ただし、売れ残った場合に限るという条件付きだけど。
出来れば、冗談だと信じたい。

「あつ、私こっちなんだけど」

左右の分かれ道。長谷部は右側を指差した。
僕は左側だ。

「ここでお別れですね」

「そつか、もうちょっと話したかったんだけどなあ。このまま家に
来ない？何だったら泊まっていくな？」

何故こうも長谷部はアグレッシブなんだろう。

年頃の女の子が、同年代の男を家に泊めさせようなんて。親御さん
はどう思うだろう。

「えっと、それはまた今度ということだ……」

「そつ、残念」

長谷部はそれ程残念そうでなく、手をひらひらと降っていた。

「今度ということはチャンスがあるってことだしね」

そう言われて、自分の失策に気がついた。

「じゃあ、また明日」

「あ、はい。また」

僕と長谷部はそれぞれ家路に着いた。

ふと、振り返って見た去っていく長谷部の後ろ姿は、何だか浮かれているようだった。

三話（前書き）

誤字脱字は特徴だ！

三話

家というのはくつろげる空間であり、そこに共に暮らす家族はかけがえのないものである。

まあ、大体がこんな風に思っているだろう。

だが、僕は違う。

家に帰っても、いいことなんて一つもない。あるのは苦痛だけ。

まるで、夫婦仲は冷め、家庭でも会社でも蔑ろにされる中年サラリーマンみたいだが、ある意味、まだその方が救いがある。

だって、離婚してそんな生活とおさらばすることが出来るのだから。今の所、僕に逃れるすべはまだない。

家に帰れば、僕は『人』から『物』にされる。

空気のように無いものとされ、時に馬車馬のごとくこき使われる。そこに情は存在しない。

きつと、僕が長澤家と”血のつながりのない人間”だからだろう。

そう、僕は養子である。兄貴ともその両親とも、血のつながりは全くない。

生まれて間もなく施設に引き取られ、小学校に入る時に長澤家に引き取られた。

本当の両親は知らない。どんな人で、どうして僕を捨てたのか。

知りたくても、知るすべはない。

ただ、『優希』という僕の名前は、本当の両親が付けたということを知ってる。

「ただいま」

僕の声に返ってくる言葉はない。

母親が居るはずだが、今頃は台所で食事の準備をしているだろう。

いや、もしかしたらリビングでテレビを観ているかもしれない。そうなると、僕が食べもしない夕食を作らないといけない。

僕は自分の部屋である屋根裏部屋に向かうため、二階に上がろうとした。

その時、リビングのドアが開き、母親が顔をのぞかせた。

「いつもより遅かったわね」

「知り合いの方と少しお話を……」

「おしゃべり？ いい身分になったわね」

彼女は僕を冷たい視線で睨みつけてくる。

侮蔑、嘲笑、それを視線の中に感じた。

その視線を僕は甘んじて受け入れる。

「今日あんたが夕飯作りなさい。遅れたり、手を抜いたら承知しないから」

そう言い放つと、彼女はリビングに戻っていった。

これが、家での僕の日常。

召使いのようにこき使われ、気に入らなければ暴力を振るわれる。

この家に引き取られてからずっとこの調子だ。

来たばかりの頃は、失敗ばかりで殴られてばかりだったけど、家事の一通りをマスターしてしまった今では、殴られることも少なくなった。

バイトもさせられているけど、そのバイト代の殆どは、両親と兄貴に奪われて僕の手元に入ってはこない。

入ってくるのは、昇給によってちよるまかしている差額分だ。

今日行った喫茶店の料金は、実はかなりの痛手だったりする。

僕は小走りで階段を駆け上がって二階に行くと、廊下の端で、フックのついた棒を使って、天井から折り畳み式のハシゴを展開させる。

ハシゴを登ると、僕に与えられた部屋である。

部屋自体は屋根裏ということもあり広いのだろうけど、いかせん、物置としても使われてもいるので物に溢れている。

掃除や片付けはしているので、綺麗にしてはいるつもりだ。

一応、人の体を通れる程の、開閉が出来る窓がついているので、その空間を僕の生活スペースにしている。

その僕の生活スペースにあるものは、ベッドに座卓、ライトに小さな本棚だけだ。服とかは、半透明のケースに入れている。

質素という言葉では言う表せないだろう。

本当に何もない。

まあ、住めば都という。ただ、立つと頭が当たってしまう高さが欠点だ。

僕は制服から私服に手っ取り早く着替えると、エプロンを着けて急いで台所に立つ。

冷蔵庫を見て、ある食材を使ってできるメニューを、頭の中で練って叩き出す。

「……はあ」

野菜を洗う水道の水が、いつもより冷たく思えた。

●

日は完全に落ち、夜となって月光が照らす中、僕はベッドに寝転がって月を見ていた。

くうと、お腹の虫が小さく鳴った。

今頃、下では僕が作った夕飯を三人が食べているだろう。

いや、結構な時間が経ったし、食べ終わっている頃か。

僕と一緒に食べる事は許されていない。そして、同じ物を食べることも許されない。

非効率的で不経済だと思うけど、そう言われているのでその通りにしないとイケない。

しばらく、空腹感を感じながら月を眺めていると、下の方が静かになっていることに気付いた。

食事が終わったんだろう。

僕は部屋から降りて、リビングを覗く。

既に、食事は終わり、両親はテレビを観ている。兄貴はいないので部屋に戻っているんだろう。

台所の流し場には、食器が山積みになっている。

「あゝ、食器片付けなさいよ」

「はい」

僕は食器を片付ける。

そして、この仕事が終わると僕の食事。食器洗い自体は、数分で終わった。

「……終わりました」

「ふゝん……じゃあはい」

そう言って母親様から渡されたのは……もやし。一袋18円。

「あんたの晩御飯」

「……はい、ありがとうございます」

またかと、内心呟く。これで、4日連続だった。母親様は、テレビの前に戻っていった。

渡されたもやしを手に、僕は頭を悩ませる。

あまり、もやし単体のメニューが思い付かない。

「……むう」

何も思い付かないので、昨日作ったナムルもどきを作ることにした。ごま油で炒め、塩こしょうをする適当料理だ。時間もかからない。

「……いただきます」

一人の食事。

メニューが侘びしいことはいつものことなのに、今日の食事はいつもと違って何だか寒く感じた。

●

今日はなんと素晴らしい日なんだろう。

この2ヶ月という日々は、とても長く感じた。

凹んだり、挫けそうにもなったけど、母様の助言の通りに積極的に関わって、押しに押しして押しまくり、最後に少し引いてみた。

すると、どうだろう。

見事に放課後デートとなった。途中、私は眠ってしまったが、本を読む長澤の姿は本当に愛らしく、その事を指摘されると顔を真っ赤にして恥ずかしがる姿は、写真に残したいくらいだった。仕方がないので、その姿は脳内に焼き付けている。

ただ、押しすぎて、鬱陶しいと嫌われているかもしれないと内心不安だったけど、別に嫌いじゃないと顔を赤らめて言われた時は、思わず飛び上がって喜びそうになった。

「ふふふっ……」

「あらあら、何だか嬉しそうね深春ちゃん」

「母様、遂に私やったよ」

「襲っちゃったの？駄目よ。ちゃんと避妊しなきゃ」

「違う！まだ襲ってない！」

「あら、まだってことは、いつかは襲うのね。大胆」

「だから違うつて。第一、そういうことは同意の上でやることであつて……」

しどろもどろと答える私に、母様はクスリと笑う。

「あらあら、ウブな娘ね」

「母様！」

「ふふ、からかうのは止めましょうか」

私の怨嗟の視線を物ともせず、お茶を飲んでいた。

「……で、何があつたの？」

「あ、えつとね——」

私は母様に事細かく、何がどうなつて何があつたか、そして長澤がどんな顔をして、どんな仕草で、どんなリアクションで、いかに私を悶絶させて萌えさせたかを伝えた。

母様はニコニコと私の話を聞きながら、お茶を飲んでいた。

「——と、言うことなんだよ」

母様は湯呑みをことりとテーブルに置くと、目をつむりながら頷いた。

「……深春ちゃんが、その優希くんの事をどれだけ好きなのかは分かつたわ」

「母様、私は好きという生半可な気持ちじゃない。愛しているんだよ！」

「……そう。なら——」

母様が、カッと目を見開いた。

「何故その愛を彼にぶつけないの！」

私の心に、衝撃が走った。

「そ、それは、まだ恥ずかしくて心の準備が——」
「甘い！」

動揺する私に、母様の喝が飛ぶ。

「恋は戦争なのよ。守勢に回っちゃ駄目。常に攻勢で反撃の隙を与えちゃ駄目なのよ。それに、いつ優希くんが第三勢力の女に盗られるか分からないわよ」

「そ、そんな訳——」

「ないとは言えないんじゃない。誰がどう思ってるか分からないものよ。案外、もう狙っている人が近くにいたりするかもしれないわよ」

「か、母様、私はどうすればっ！」

「大丈夫よ」

厳しかった母様の語気が、ふと和らいだ。

私に投げかける視線も優しい物となり、ふわりと微笑んでいた。

「深春ちゃんは、既に優希くんの前線を壊して心に入り込んでいるわ。後は、押して押して押しまくったら、優希くんは折れてコロリよ」

「母様は押せというけど、具体的にはどうすればいいの？」

私の問いかけに、母様は不敵な笑みを浮かべて口元を歪めた。

「ふふ、そうね。深春ちゃん、優希くんに告白しなさい」

「うええええええええええ！」

あまりの突拍子のなさに驚いた。

「あら、驚くことかしら？」

「お、驚くよ！いきなり告白なんて出来ないよ！」

恥ずかしさとか色んな感情がごっちゃになって、目が熱くなって潤んできた。

「そうかしら。告白というトマホークミサイルで、一気に優希くんの心の要塞を壊しちゃえばすぐよ？」

「でもでも、断られたら——」

「そしたら、ひたすらアタックしたらいいのよ。どうせすぐにOKが貰えるわよ」

「うう……」

無理、無理だよ！

母様のようにアグレッシブなようには行かない。

どうしても、断られたらと思うと踏ん切りがつかないのだ。どう考えてもまだ早い段階じゃないんだろうか。

そんな様子の私に、母様はため息を吐いた。

「……まあ、地道に外堀を埋めていくつてもあるけどね。時間かかるわよ」

「そ、それなら大丈夫だと思う」

根拠はないけど。

「で、どうすればいいの？」

「そうねえ……じゃあ、デートしてきなさい」

「デート？デートなら今日——」

「違う違う。寄り道とかいって誤魔化すんじゃないくて、ちゃんとデートと言って申し込んできなさい」

「……デート」

脳裏に思い浮かんだのは、洒落たオープンカフェで楽しく会話をする光景。映画館でホラー映画を鑑賞して抱きつく光景。遊園地で共に遊び、夕焼けの観覧車で……な光景。そんな漫画でもありきたりな光景だった。

「分かったよ。私、頑張る」

握り拳を握って決意を固める私に、母様はにっこりと微笑んで、

「じゃあ、早速明日誘ってきなさい」

そんな無茶を言ってくれた。

「……えっ？明日？」

「そうよ。明日が休みで良かったわね」

「休み……？」

ふと、今日が金曜日であることを思い出した。長澤と別れる時に”また明日”と言ってしまったけど、これは長澤と逢う口実になるんじゃないか。

長澤だって、”また明日”って返していたし、逢う同意は得れてるよね。

「さあ、そうと決まれば早速プランをたてましょう。母様も手伝ってあげるわ」

「ありがとうございます！」

こうして、親子の作戦会議は夜が更けても続いていった。

●

くしゅん！

「……なんだろう。寒気がした。やっぱり風邪かなあ」

四話（前書き）

あ、プロットがどっかに消えた。

四話

今日は土曜日。

隔週での週休2日制を導入している我が校でも、今日は休みだということをすっかり忘れていた。

それでも、僕の生活パターンが変わることもない。

朝の五時には起きて、休日出勤の父親様と部活の兄貴様のお弁当を作り、さらに朝食を作る。それが終わったら、掃除洗濯に飼い犬のホタテ号の散歩と休まる暇がない。

ただ、今日はその生活パターンが少し変わりそうだった。

「……………」

僕が、ホタテ号を散歩に連れて行くこうとして、リードを繋いで敷地を出ようとした時だった。

この辺りでは見掛けない顔の人間がいた。

「やあ」

僕に気さくに声をかけてきた。

マスクにサングラス、帽子を目深に被ったセーラー服の人。

その声、セーラー服から多分女性なんだろうが、こんな変な人、知り合いにはいない。

糞兄貴の関係者だろうか？

でなければ不審者だ。

「……………何でしょうか」

不信感が満載なので、機械的に冷たく応対する。

もしもの時は、番犬のホタテ号が何とかしてくれるだろうか。
……いや、駄目だ。尻尾振って不審者を見つめている。人に懐きすぎて番犬にもならない。

「……あ、あれ？何のリアクションもなし？」
「……はあ？」

何だこいつ。警察に電話して欲しかったのだろうか。
生憎、携帯電話という文明の利器は持っていないので、この場で通報は出来ない。

「して欲しいなら、警察に通報しますけど？」
「エエッ！なんで警察！？」

本当になんだろう。この人は。
もしかして、自分の格好に気づいていないのだろうか。

「サングラスにマスク、帽子まで目深に被ったアナタの格好を、不審者と思わない人はいないと思いますよ」
「えっ……ああ！取り忘れてたあ！」

わたたと、目の前の少女はその怪しい格好を解除していく。
そして、僕もよく知る美少女に生まれ変わった。

「じゃあ〜ん」
「……ああ、佐山さんですか」

佐山 夏帆。今ときめくアイドルだ。ライブを開けば満員御礼、CDを出せばオリコントップ10入り、街を歩けば大混乱を引き起こす程の人気者だ。

そんな彼女が何故ここにいるのか。それは、幼なじみという関係だからだろう。

ただ、人気アイドルなのだから、簡単に他人の家に来るのは控えて欲しい。

「えっ、なにそのリアクション」

「……あなたは僕に何を求めているんですか」

僕にどうしろと？

「久しぶりに会ったんだよ？もっとう……喜びとか感動とかさあ」

「兄さんなら、あなたの希望に添えると思いますよ」

あの糞兄貴は、佐山と会いたがっていた。きつと、両手を上げて喜ぶだろう。

何せ、兄貴は佐山の事が昔から好きなのだから。

学校ではハーレム構成している癖に、妙に一途なんだ。

「まあ、カズ兄も会うのは久しぶりだけど、メールとかしてるし……。あ、ゆー君のメアド教えてよ」

ニコニコと笑顔で携帯電話を取り出すが、僕は首を横に振る。

「僕は携帯電話持ってないんで」

「え、なんで」

「お金がないんですよ」

しばらく、佐山は茫然としていた。携帯電話を持たないのがそんなにおかしいだろうか。

「……うん、じゃあいいや。これからは一緒に通えるしね！」

佐山はくりりとその場で回った。
スカートがふわりと舞う。

そういえば、セーラー服には見覚えがあった。

「……姫井高校の制服ですか」

この辺りでは屈指の進学校。私立ということもあり、施設環境やカリキュラムが充実している。

さらに、立地が街中ということもあって、近くに駅があり、バスも止まる。

もちろん、帰りに遊んで帰ろうと繁華街に出るのも簡単である。

そんなことで、結構な人気校だ。

「そう！どうかな、似合う？」

「似合ってますよ」

「そっか！良かった！」

佐山が、ひまわりのような笑顔を浮かべた。

記憶にある昔の笑顔とは変わっていないように見えるけど、何も感じない。何も感じなかった。

「……どうせなら、兄さんに制服姿を見せてあげてください。兄さんも、あなたと同じ姫井高校ですし……僕には関係ないです」

そう、僕には関係ない。

かつての幼なじみが、兄貴と同じ高校に行こうと。

佐山は不思議そうに首を傾げた。

「えっ？関係無くはないでしょ？同じ高校に通うんだから」

ああ、そう言うことか。

僕は一人納得した。

佐山は勘違いしている。僕が姫井高校に通っていると。

「……僕は市崎高校ですよ」

「……………えっ」

僕は比較的近場にある市崎高校に通っている。

特に有名大学に輩出する進学校でもなく、これと言って部活動が強い訳でもなく、かと言ってマンモス校でもない。

「でも、カズ兄が、ゆー君が姫井高校に受かったって……」

あの糞兄貴。なんと人が悪い。

もしかしくなくても、こうなることを分かっていて、一部しか情報を与えなかったんだろう。

「確かに、姫井高校には合格しましたが、お金がちょっと……」。

その分、市崎高校は特待生として授業料免除のうえ奨学金という風にしてくれたんで」

僕が市崎高校に決めた理由。それは、その成績優秀者の特待生制度と奨学金制度に他ならない。

この制度を利用するためには、常に成績優秀者としていなければならないが、それは別に苦になることではない。

「えっと、つまりゆー君は姫井高校を蹴って市崎高校にしたってこと……？」

「まあ、そうですね」
「そんなあ」

泣きそうな顔で、責めるように僕を佐山は見てくるが、それはお門違いというものだ。

「高校こそは、一緒の学校にと思っていたのに……」

どんまい！

としか言いようがないのだけれど、どうすればいいだろう。
そんな時だった。

「やあ長澤」

よく知る顔が声をかけてきた。

「……長谷部。どうしてここに？」

「いや、長澤に会いに来たんだ」

「僕の家、知ってましたっけ？」

「別にいいじゃない、そんなこと」

よくはない。

長谷部が佐山と視線があった。

「……長澤。佐山 夏帆じゃない」

「そうですけど、長谷部、人を指さすのは失礼ですよ？」

「確かにそうだけど、いや、なんで佐山 夏帆がここに？」

「幼なじみなんですよ、一応」

くいくいと、服の袖を引かれた。

「ねえ、ゆー君。この人誰」

「えっと、長谷部 深春さん。同じ学校の人です」

「ついでに言えば、将来を約束した仲なんだよ」

「違います！変な事言わないでください！ただの友達です！」

長谷部はニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべていた。

何という嫌がらせ。

「友達ねえ……」

ニヤニヤニヤニヤ。

…… あっ！僕は何てことを言ってしまったんだろう。

長谷部の事を友達なんて言ってしまった。これでは、僕自ら長谷部を友達と認めてしまったではないか。

「ゆー君のお友達なんだ……」

「ち、ちが——」

「そう、長澤とは友達。二人で喫茶店に行くようなね」

「——っ！」

佐山のくりつとした大きな目が、さらに大きく見開かれた。

「……あなた、まさか」

「お察しの通り」

「くっ！」

何故か、長谷部は勝ち誇ったように佐山に流し目を流している。

そして、佐山は悔しそうに下唇を噛んでいた。

殺伐とした空気が支配した。

「……あら、なに、まだホタテの散歩に行っていないの」

前触れもなく、玄関のドアが開き、中から母親様から出てきた。

今から買い物にでも行くのだったのだろう。買い物籠を持っていた。

母親様は、佐山と長谷部の姿を見つけると、表情を変えた。

「あら、夏帆ちゃんじゃない。お久しぶりね」

「お久しぶりです。おばさん」

佐山は笑顔で頭を下げた。

母親様の視線が長谷部に向く。

「えっと、そちらの方は？夏帆ちゃんのお友達？それとも和哉のお友達かしら？」

「いえ、私は優希君のお友達で長谷部 深春といいます」

「優希のお友達だったのねえ……」

じろりと、母親様に睨まれた。

その視線には、『何勝手に友達なんかと油売っているんだよ』という意味が含まれていた。

僕は、小さくごめんなさいと呟く。

「夏帆ちゃんは今から仕事？ごめんなさいねえ、優希が引き止めちゃったんでしょ、悪かったわねえ」

「ち、違います。今日はゆー君やカズ兄に制服姿を見せびらかしに来ただけで……」

「あら、和哉に？」

母親様は嬉しそうに手を叩いた。

「あの子、もうしばらくしたら部活に行くところだったの。ちょうど良かったわ」

そう言っていると、母親様は家の中に引っ込んだ。

「和哉！夏帆ちゃんが来てるわよ」

母親様がそう叫ぶ声が聞こえた。

しばらくすると、ドタバタという音が近づいてきた。

「――夏帆！」

イケメンが家から飛び出してきた。

こいつこそ、長澤家の長男であり、佐山の事を想っている兄、長澤和哉。

文武両道を地でいく人で、部活のサッカーではエースストライカーであり、更に成績は優秀。

女癖が悪いらしく、その甘いマスクで数々の女の子を籠絡して、学校ではハーレムを構成して女には困ったことがないと聞いている。それでも、本命は佐山一筋だそうだ。

「おお、姫井の制服！受かったんだ」

「あ、うん」

「となると、和哉と夏帆ちゃんは同じ高校に通うことになるわねえ。嬉しいわ」

「夏帆、これから一緒に学校に行こうな」

「え……私……」

困った顔をして、佐山が僕に助けを求めるようなに見てきた。

でも、どうしようもない。

兄貴が凄い形相で牽制してくるのだから。

「まあ、家人ってゆっくりして行けよ。仕事の話しも聞きたいし」

「そうね。私も聞きたいわ」

「え、でもカズ兄、部活なんじゃ」

「いいんだよ。別にそんなことは」

兄貴は、佐山の背中を押して、家の中に入れようとする。

「エッ、あ、ちょっと……！」

パタン……。

佐山はなすすべなく兄貴と母親様に連れ込まれてしまった。
そんな光景を、僕と長谷部は啞然として傍観するしかなかった。
しばらくして、再び玄関のドアが開き、母親様が顔を覗かせた。

「あ、買い物行ってきて」

「は、はい」

差し出された買い物籠を、僕は受け取った。

またすぐに、ドアは閉まって閉め出される形になった。

「……長澤」

「なにも……言わないでください」

「……………」

きつと、長谷部は分かっているんだろう。だからそんな悲しそうな顔をするのだと思う。

「……とにかく、ホタテの散歩のついでに買い物に行かないといけませんね」

「あの…私も一緒にいいかな……？」

だと思った。

人差し指をくるくる回して、長谷部は僕の様子をチラチラと見ていた。

「そう言うと思ってました。行きましょう」

僕は、長谷部に手を差し出した。

この時、僕は初めて自分から他人と関わろうとしたのだった。

「……うん」

長谷部がパアッと顔を明るくして、差し出した手を握った。

こつもコロコロと変わりやすい表情をするのは面白い。

僕達は、二人と一匹並んで歩き出した。

五話（前書き）

難産雲山無理矢理KAN

五話

買い物と言つても、そんな遠くに行ったり、沢山の物を買ひ込む訳でもない。

僕一人が、ホタテ号の散歩ついでに行くことは全然構わない。だけど、全く関係ない長谷部を、僕の用事に巻き込んでしまった事が申し訳がなかった。

「ごめんなさい。僕の用事に巻き込んでしまつて」
「いいよいいよ」

そう言つて、笑顔で返してくれるのは有り難かつた。

「長谷部も何か用事があつて外出していたのでしょうか？ いいんですか」

「んゝまあ、あつたと言えばあつたけど」

長谷部は少しはにかんで、自分の頬を掻いた。

「結果オーライで果たしちやつた感じ？」

「……はあ」

よく分からないけど、用事は済んだらしい。

「なら、良かったです」

その後、しばらく会話は続かなかつた。

僕も長谷部も、ただ黙つて歩を進める。

時折、チラチラと長谷部が僕の様子を伺うように目を向けてくる。

何か気になることがあつて聞きたいけど、何だか聞き辛いなあ、という心の声が聞こえそうなくらいの分かりやすさだ。思わず、不覚にも少し笑ってしまった。

「な、何を笑つてるのかな」

「いえ、まるで犬みたいだと思つて」

「犬？」

「ええ、まるで飼い主に叱られた後に様子を伺うような……」

「ななつ、それは馬鹿にされてるような気がする」

怒りが羞恥か分からないけど、顔を赤く染めた長谷部に僕は言う。

「馬鹿にしているんです」

途端、長谷部は餌を頬に餌を詰め込んだハムスターのように頬を膨らませた。

うん、あざとく見えて可愛くない。

「長澤は、もっと私に優しくしてもいいと思う」

「エッ、十分優しいと思いますけど、遊んだりしてますし」

「それって、絶対私のこと弄って遊ぶって意味だよな！そんなの優しさじゃない。優しさとは認められない！私は女だし、そんな形でも一応男の長澤は、私を優しく扱う義務があると思います。それが、紳士というものだと思います！」

なにやら喚く長澤を、軽く聞き流していたけれども、途中に聞き捨てならぬことを言っていた。

一応男？

そんな形？

あれか、僕の容姿か。顔か。

確かに、男にしては女性的な……いや、かなり女性的な容姿ではあるけれども。どうせ、成長していけば男らしくなるものだ。

……そう思ってた早数年。一向にその気配が無く、声変わりすら無く、身長ですら女子と肩を並べるくらい。

もうそりゃ、コンプレックスの塊。

僕が本当に男か自分ですら疑うくらいだ。

「……そうですか。ですが、今は男女平等な社会ですので、そういうことをするのはおかしいですよね」

「異議あり！」

「却下します」

そんな不毛なやり取りをする間に、目的のスーパーが見えてくる。まだ優しくしろだとかとぶー垂れている長谷部に、僕はホタテ号のリードを差し出す。

「……なに？」

「ホタテのリードです。持っていてください」

「なんで」

「店内はペット厳禁ですから」

僕の言わんとしていることが理解できたのか、長谷部はうんうんと頷いた。

でも、リードを持つとはしない。

僕は首を傾げた。

「どうしました？」

「……なら、その支柱に縛って置けばいいじゃない！」

ビシッと、長谷部は自販機近くにある自動車留めの柱を指差した。

「……迷惑になりませんか？」
「大丈夫！」

その自信は、どこから来るのか知りたくもない。

「……分かりました」

僕は仕方なくホタテ号のリードをくくりつけた。
ああ、そんな目で見ないで、すぐに戻ってくるから。

「じゃあ行きましょう」

僕と長谷部は店内に入った。

●

勝手たる他人の家。
そんな感じで、既にこのスーパーの商品配置は体に染み着いている。
メモを見ながら、必要な物を入れていく。

「玉子にキャベツと……またもやし……」

このもやし、また僕の晩御飯になるんだろうか。

「それにしても……まるで主婦みたいだね」
「……ふざけないでください」

「いやいや、その手際の良い買い物の仕方、そして新鮮で良いもの
を見極める力、これで料理や家計ができれば、いい奥さんになるよ」
「……………」

ほとんど出来ます、なんて言えなかった。
だって、恥ずかしいし……。

「……長澤？」

「あ、うん。なんでもない」

訝しそうな長谷部の視線を感じるけれど、早いところ買い物済ませないと行けない。

ホタテも待っているだろうし、なにより、母親様の機嫌を損ねて晩御飯を抜きにされては堪らない。

「さあ、早く済ましましょう」

「手伝おっか？」

「助かります。じゃあ、鮭の切り身を四切れ取ってきてくれませんか？僕はお肉コーナーにいますので」

「分かった」

長谷部は僕にくるりと背を向けると、そのまま雑踏に消えていった。段々、人が増え始めている。

僕も急がないといけない。

お肉コーナーに行くまでに、メモにある数品を入れた。

「長澤！」

嬉しそうに、弾んだ声で長谷部が走り寄ってくる。

その手には、しっかりと頼んだ物があった。

だけど、店内では他の人の迷惑になるので走っちゃいけません。

「他の人の迷惑になります。走らないでください」

「う、ごめん」

全く、まるで子供をもった母親みたいなことを注意しないといけないんですか。

「な、長澤、他に買うものはある？」

「そうですね……」

メモを見る限り、ない。

「無いですね。レジに行きましょう」

長谷部はこくりと頷いた。

僕と長谷部は混みあうレジに並んで会計を済ませると、店を出てホタテのところに行った。

ホタテは、僕の姿を確認すると、尻尾を振って喜んでいた。

「さて、帰りましょうか」

そう言って歩み出した帰路は、終始無言だった。

その微妙な空気を察知したのか、ホタテ号が時折僕の顔色を伺うように見上げてくる。

犬にまで心配されるのか、僕は。

「な、長澤」

「……何ですか」

「えっと……ね」

何かよほど言いにくいことなのか、長谷部は言いよどむ。
なんとなく、察することができた。

「長澤は、家族から……その……酷い扱いを受けているの？」

やっぱり。

僕は静かにため息をついた。

「何を持って酷いとなるか分かりませんが……まあ、お察しの通りですね」

その瞬間、長谷部の表情が劇的に変わった。

哀れみ、悲しみ、怒り、驚き、不安……。負に近い感情の様々が、ごっちゃになったようだった。

ただ、心底僕のことを心配していることは分かった。

「暴力とか大丈夫？ちゃんと食事も取ってるの？」

「暴力は今ほとんどないですし、食事も死なない程度に取れていますんで、大丈夫です」

「死なない程度って……本当に大丈夫？」

「大丈夫です」

僕は腕捲りをして、元気であることをアピールした。

空元気ではあるけれども。

長谷部には要らぬ心配をして欲しくはなかったのだ。

これは僕の家庭での問題であり、長谷部には何の関係もない。

だから、僕が長澤家にて数世紀前の奴隷みたいな扱いを受けていることに、もうすでにあきらめてしまっていることも、知られたくはなかった。

「……何かあったら、私が力になるから」

「ありがとうございます」

でも、僕はどうなっても長谷部に頼ることはないだろう。
何故なら――

「そうだ！」

突然、長谷部の上げた声に、思考を中断せざる負えなかった。

「な、なんですかいきなり」

「忘れてた。私」

「はあ？」

何か、買い忘れてもあつたのだろうか。

「ねえ」

ずいっと、長谷部が僕に顔を近づけた。
少し、僕は後ろにのけぞる。

「今度、デートしよう」

「……はい？」

ワンモアプリーズ。

その意味が籠もった疑問。

しかし、いきなりすぎる爆弾の投下だったので、頭が対処仕切れなかったようだ。

言葉を間違えた。

長谷部はその疑問が籠もった『はい？』を、イエスの『はい』と受け取ったのだ。

「いゝやったあ！」

「え、あの」

「じゃあ、来週日曜日ということで！詳しくは後程！」

「ちよつと、どこ行くんですかあ！」

長谷部はくるりと180度回転して、先程来た方向に走り去ってしまつた。

残された僕はぽつねんと、買い物籠を持って突っ立っていた。

いきなり何なんだ。一体全体どうなっているんだろう。

僕を見上げているホタテ号が、何だか憐れみで見ている気がした。

六話（前書き）

誤字脱字？知ってるさ！直さないだけ！

六話

私は自分の部屋で一人泣いていた。

昔から馴染みの長澤の家から帰ってきて、なにも言わずに自分の部屋に直行した。きっと、リビングでは母さんが心配していることだろう。

「……はあ」

本当に、悲しくなる。

小学校を卒業する頃から、今日の今まで会うことがあまりできなかった幼なじみ。

私がアイドルとしての道を踏み出すキツカケ。

彼に近付きたくて、笑って欲しくて……アイドルになったっていうのに、余計に遠ざかってしまった気がした。

「……ゆー君」

その名前を呼べば、昔の楽しかった日々を思い出す。

昔の私はお転婆で男勝り。部屋でおままごとをするより、外で走り回るようなお転婆娘だった。今では黒歴史だったりする。

そんな私のブレーキ役がゆー君だった。

私達は毎日のように遊び、一緒にいた。毎日が楽しかった。

よく、私はゆー君の前で得意の唄を歌っていた。

といっても、その当時観ていた女の子向けのアニメの主題歌だったんだけど、分かっているはずなのにゆー君は笑って手拍子をしてくれて……それがとても嬉しくて、ゆー君に笑ってくれるのが嬉しかった。

その頃からだ。私がゆー君のことが好きだと気付いたのは。

アイドルになつたのも、ゆー君のため。

私の唄で笑っていてほしいから。

それを胸に頑張った甲斐があつて、この三年ちよつとの間で私は人気アイドルにまで登り詰めた。

コンサートを開けば、みんな喜んで私の唄を聴いてくれたし、色々なテレビにも出演もした。

私を知っているみんなは、喜んでくれていた。

だからきつと、ゆー君も喜んでくれていて、笑ってくれていると思つていた。

でも、違つていた。

駄目だつたんだ。それを今日、身を持って実感した。

「……佐山”さん”だつて」

苗字、そして”さん”付け。

昔のように、『なつちゃん』とは言ってくれなかった。

それに、私と話していても無表情で笑ってくれもしてくれなかった。

三年という月日は、思ったよりも重いものだった。

分かつていたはずなのに、ゆー君の事が分からない。

今のゆー君が分からない。

一緒に居なかつた中学時代の三年で、こんなに分からなくなるなんて……。

「アイドルなんか、ならなきゃよかった……」

だったら、ゆー君と同じ中学に行つて、高校だつて同じところに行けたかもしれないのに……。

昔と変わらず、笑つてくれたかもしれないのに……。

時というのはなんと残酷なのか。

私が立っていた場所には、既に違う人が立っているだなんて。

「……長谷部 深春」

私が立っていた場所に立っていた人。

ゆー君の同級生でお友達。そして、ゆー君の隣に立つ人。

私と違って、ゆー君は彼女と出会うと表情を綻ばせていた。
どうして。

私と彼女の違いは何。

どうしたら、ゆー君は私に笑いかけてくれるの……。

正直、彼女が羨ましい。そして、妬ましい。嫉妬している。

ゆー君の笑顔を向けられている彼女が羨ましい。

アイドルなんかにならなかつたら、その笑顔は私に向けられていた
だろうか。

ゆー君の隣には、私が立っていたのだろうか。

「……私は……」

どうすればいいのだろう。

このまま手をこまねいて、ぽつと出のどこの馬の骨と分からない人
に、長く片思いをしてきたゆー君を盗られてしまったら、元も子も
ない。

それだけは嫌だ。

絶対に嫌だ。

そう、長谷部 深春。彼女はゆー君に想いを寄せている。

今日、初めて出会ったけど分かる。ライバルだ。

しかも、ゆー君も彼女に心を許しているみたいだし、現時点での私
と差が開いている。

このままでは、近いうちにゆー君は彼女と引っ付きかねない。

なんとしても、ゆー君の心を私に向けるようにしないとイケない。
でも、そんなことが出来るのか。

アイドルの仕事もある。学校も違う。

接点もないに等しく、会いに行くにもままならないこの状況は、あまりにも不利。

武器になりそうなアイドルという肩書きも、こうなったら邪魔にしかないそうにない。

「……やめちゃおっかな、アイドル」

もとより、ゆー君に笑って欲しくて始めた仕事。

そう簡単に辞めれないくらいに分かっている。色んな人に迷惑だっ
てかける。

沢山の応援してくれたファンだって悲しむだろう。

でももし、このままアイドルを続けたとしても、ファンとかを笑顔
にする事ができても、ゆー君が笑ってくれることはあるだろうか。

肝心のゆー君を笑顔に出来ないのに、アイドルを続ける意味はある
のかな……。

大勢のファンや事務所の関係者を取るか、一人の大切な幼なじみ
を取るか。

私の中で、既に選択肢は決まっていた。

●

決めたからには即行動。

私は、携帯電話を取り出すと、電話帳の仕事欄のある番号に電話を
掛けた。

相手は、事務所の社長。

私からアイドルとしての可能性を見だし、ここまで育ててくれた
一人だ。

「はい、もしもし。ヒナタエンタープロダクション雛田です」

キャリアウーマンのような冷静さのある落ち着いた女性の声。
社長だ。

「夜分遅くにすみません。夏帆です」

「ああ、夏帆ちゃん。久しぶりの実家はどうか？」

「母さんも父さんも喜んでやって、母さんは晩ご飯に私の好物を沢山作るって張り切って、父さんは仕事を休むために昨日大変だったって」

「いいご両親ね。それで何のようかしら」

「それは……」

少し言葉に詰まったけれど、覚悟を決める。

「私、アイドルを辞めます」

「……………」

しばらく、電話の向こうが沈黙した。

「……理由、聞かせてくれるかしら」

「それは——」

私は、全てを話した。

ゆー君のこと。

私がゆー君のことが昔から好きなこと。

アイドルになったのも、一つの手段だったこと。

久しぶりにあったら、ゆー君と予想だにしない距離が空いていたこと。

そして、恋敵の存在。

私の考え、思い、感情をぶつけていくうちに、自然と泣きはらした

はずの涙が頬を伝っていた。

「……そう、それは辛かったわね」

「はい」

「でも却下」

「……はい？」

流れていた涙が嘘のようにすつと引いた。
なぜ、どうして。話の流れ的におかしくない？

「——どうして!？」

「どうしたもこうしたもいきなりすぎ。こっちにも都合があるし、
そう簡単にハイそうですかなんて言えないわよ」

「……じゃあ、都合がいたら辞めてもいいんですね」

「そうね、考えておくわ」

「——社長！」

それって、結局駄目ってことなんじゃないか！

「私からゆー君を奪うつもりですか!」

「……アイドルは原則恋愛禁止……何てことは言わないわ。でもね、
あなた、ライバルが出現して慌てている。周りが見えてないの。少
し落ち着きなさい」

「落ち着いていられますか!私は……私は急がなきゃいけないんで
す!」

でないと、本当に取り返しがつかなくなる。

失われた三年を埋めなければならぬのだから。

「それに社長、私がアイドルになるときに言いましたよね」

「……………」

「アイドルになれば、好きな人も振り向いてくれる」って。私はゆー君に笑って欲しくてアイドルになったんです」

「知ってるわ。口癖のように言っていたわね。そして、あなたは今や沢山の人に笑顔を届けているわ」

「……だから駄目なんです。私はゆー君に笑って欲しかったんです。でも、ゆー君は笑ってくれなかった……」

「でもあなたは沢山の——」

「だからそれじゃ駄目なんです!!」

柄にもなく、私は電話口に泣き叫んだ。

「ゆー君が! ゆー君が笑ってくれなきゃ、私がアイドルなった意味がないんです!」

そう叫んで、私は声をあげて泣いた。

悔しくて、悲しくて、虚しくて、やるせなくて……。

電話を掛けっぱなしのまま、私はわんわんと泣いた。

「夏帆、ちょっと泣き止みなさい。ねっ、分かったから——」

電話から、社長の慌てた声が聞こえる。

それにしても、こんな風に泣いたのは小学校以来だ。

しばらく泣くと、自然と心が落ち着いてくる。

「……落ち着いた?」

「はい、すみません」

「いいわよ。全く、うちのアイドルが取り乱す程ご執心の相手がどんなのか見てみたいわ」

「……社長、昔会ったことがありますよ?」

「えっ、嘘。どこで」

「私の家に挨拶に来た時です。丁度遊びに来ていたんですよ」

「……ん〜？」

「ほら、冗談で社長がスカウトしようとしていたじゃないですか」

「……………」

しばらく沈黙が続く。

「……ああ、あのイケメンな子」

「あ、多分それはカズ兄です。そのもう一人です」

「……もう一人って、あの可愛い妹さん？」

「あ、そうです。でも妹じゃなくて弟ですよ」

「そうだったの……普通にアイドルとしてスカウトするつもりだったわ」

「……………」

「……………」

またしばらく沈黙が続く。

「……まあ、人の好みにとやかく言わないわ」

失礼ですね。

「あなたが彼の為にアイドルを辞めるっていうのも分からんことでもない」

「……………」

「でもね。早すぎるんじゃないかなって思っのよ」

「どこがですか。遅すぎるの間違いですよ」

「なら、あなたは彼にアイドルとして働いている姿を見せたことがある？」

「……テレビ越し——」

「じゃなくて」

「……ない」

「あなたはアイドルとして歌っている姿を見せたことがある？」

「……ないです」

「なら、アイドル佐山 夏帆としての姿をちゃんと見てもらってか
らでもいいんじゃないかしら？」

「……」

どうなんだろう。

確かに、私のアイドルとしての姿をちゃんと見てもらっていない。
アイドルとして、私の唄で笑って欲しいと思いながら、私はゆー君
の前で歌っていない。

私の姿を知ってもらえば、変わらないことを知ってもらえば、ゆー
君との距離が昔みたいに縮まるかもしれない。

私はゆー君の為と思いながら、結局ゆー君の為に何もしていなかつ
た。

こんな事にも気付かないなんて、私は馬鹿だ。

「……社長」

「決まったようね」

「私、もう少し続けます。ゆー君に私の姿を見て欲しい」

「分かったわ。うちのアイドルの恋路、バックアップしてあげるわ」

「——社長！」

「だから、頑張って落とさないよ。長年の恋」

「はい！」

私はヒタタエインタープロダクションを全面バックアップに付けて、
長年の恋を実らせる為に行動に出た。

六話（後書き）

……ヤバいです。

予定では十話で終わるつもりでしたが、延びそうです。この調子なら。

しかも、当初プロットから脱線して横転して別路線を突っ走っていきそうです。

予定外の恋愛度高いラブコメに変わり果てそうで戦々恐々。

あつれー、根暗ちよいラブコメにするはずなんだけども……。次書くのが怖い。

こんな気分は初めてだ。

七話（前書き）

脱線して長くなったので、キリがいいところで投下。こんなはずじやなかったのに……。

七話

「さあ、デートに行こう!」

梅雨特有のジメジメ感はあるものの、晴天に恵まれた日曜日の午前。ちよと掃除を終わらせた時に来客を知らせるチャイム鳴り、エプロン姿のまま僕が玄関を開けると、長谷部が立っていたのだ。そして、いきなり家にやってきた長谷部はそう告げたのだ。

全くもって意味が分からない。

確かに、今日がお出掛け日和ではあるのは認めるが……何故デート?それに、僕にはまだ家事の仕事が残っているのだ。出掛けることは出来ない。

「……まだ仕事が残っているので、その誘いはちよと今は……」
「問題なし!」

……本当に意味が分からない。

「ささっ!」
「えっ、あの!??」

長谷部に強引に腕を引かれる。

その時、僕の慌てる声を聞いた母親様がリビングから顔を覗かせた。

「……ちよと、一体なに?お客さん?」
「あ、おばさん。今日一日優希君をお借りします!」
「ハ?借りるってあなた……ちよと!」

僕は長谷部に腕を引かれるまま、着の身着のままで連れ出されてしまった。

走る長谷部に、腕を掴まれている僕も走らざるおえず、どこに向かっているのかも分からない。

ただ、なんとなく。長谷部は長澤の家から急いで離れようとしている気がした。

「ちょ、長谷部。速い……！」

さすが体育会系。足が速い。

文化系の僕には到底無理な速度で、長谷部のスピードに無理やり合わされている僕は足がもつれそうになる。

「……この辺りで大丈夫かな」

そう言つて長谷部が足を止めたのは小さな公園。近くにある公園だった。

「……はあ、はあ、全く。何ですかもう……」

僕は乱れた息を整えようとするが、日頃の運動不足故に体力が回復しない。

息一つ乱さずにケロッとしている長谷部が信じられない。

少し恨みを込めて長谷部を睨みつけると、何故か長谷部は頬を染めていた。

「……いい」

「ハ？」

「頬を上気させて、息を荒げる姿……性的興奮を我慢しているようで……いい」

「……………」

どうやら、頭が沸いているようだった。

「ああ、我慢しなくて私を襲っていいんだよ」

「誰も襲いません」

一人悶える長谷部に、冷ややかな視線を浴びせるが、動じていないようだ。

まったく、やってられない。

僕は小さくため息をついた。

慌てて飛び出してきたので、ちゃんと履くことが出来ていなかった靴を履き直した。

「それで、僕を連れ出してどうするんですか？」

「×××××」

午前には相応しくない言葉が出てきた。

いや、それ以前に女性としてもどうなんだろうか。

公然の場でそんな事言うもんじゃない。

恥ずかしい。恥ずかしすぎる。

いや、なんで言った本人より、言われた僕の方が恥ずかしがっているんだ？

「あ、赤くなってる」

「——っ！」

「余計赤くなっただけ」

ああもう！まったくこの人は！人をからかって遊んで！

「あなたって人は！人をおちよくって遊んで！冗談が過ぎるんです！」

「ごめんごめん」

まったく……。

「それで、どうするんですか？」

「うん、言った通りデートだよ。約束してた」

「確かに約束しましたけど……無理矢理引つ張り出さなくても」「そうしないと、長澤は来れないでしょ」

否定は出来なかった。いや、むしろ肯定する。

僕の家庭環境を考えると明らかだ。

それを、長谷部は分かっていたから、あんな風に連れ出したんだろう。

しかしだ。

「……デートと言っても、僕、エプロン姿何ですけど」

いや、エプロン外せばいいんだけどね。

その、やっぱり格好とか気になる訳ですよ。一応。

「エプロン外せば問題なし！気にすることはないよ」

そう言われても、実はまだ気にしていることがありまして……。

「後、僕は財布持ってきてない……」

そのまま来たら、財布を持って来れなかったのだ。お金がかかるところに行つて、一方的に長澤に奢られるってのもし

やくだ。

「大丈夫。そこのも考えている」

自慢げに、長谷部は胸を張った。

そして、僕の目の前に見せたのは、一つの鍵だった。

●

市崎駅。

そこにあるコインロッカーの前に僕達はいた。

長谷部に連れて行かれるまま、ここに来たのだ。

「ふっふん」

カチリと音をたて、ロッカーの一つが解錠された。

長谷部がロッカーを開くと、そこには大きなバスケットが入れていた。

「長澤の家に行く前に入れておいたんだ。走るには邪魔になるしね」

「はあ……それで、中身は何なんです？」

「それはまだ秘密」

そう言うと、長谷部はスカートを翻して駅を出て行く。

僕はその後をついて行く。

「電車に乗るんじゃないんですか？」

「お金かかるから。ついてくれば分かるから」

「……むう」

秘密にされるのは不満だ。

何だか、長谷部にかかわれている気がしてならない。
しばらく長谷部の後について歩く。

「……………」

そのうち、何となく長谷部の行き先が分かった気がした。

この町は、何やかんやスポットたる場所が少ない。

だから、大体のスポットの場所は分かっていた。

今向かっているのも、その内の一つ。でも、デートに行くスポット
ではないはず……………。

だってそこは……………。

「着いた」

ただの森なんだから……………。

「…………『百年の森』ですか。どうしてこんな所をまた……………」

木々が鬱蒼と生い茂る森。

名前の由来は、町で百歳を越えたご老人達の名前が刻まれた碑が近くにあるからだ。

周りにこれといったものもない。

体を動かしたり、遊んだり出来るスペースが少しあるくらいだ。

「あ××んも一興だと思っただよ」

「……………帰ります」

最悪だ。

何がつて、もう色々と。

人の性癖には何とも言わないけど、自ら口にすることじゃないと思う。

「待った待った！今は冗談だから」

長谷部は、帰ろうとする僕をヘッドロックして止めようとする。首が微妙に締まるし、密着しているから胸の膨らみが当たる。

勘弁してほしい。

「……胸が当たってますけど」

「当ててるのよ」

「……………」

僕は無理矢理歩みを進ようとした。

「ああ！待って！タイム！ウェイト！」

「…………ぐえ」

キュイツと首が余計に締まった。

長谷部が腕の力を強めたんだろう。

見事に首が締まった。

「あ、ごめん」

すぐに長谷部は解放してくれた。

ケホケホと咳をする僕の背中を撫でて、労ってくれる。

「大丈夫ですよ、もう」

「ホント、ごめん。あんな綺麗に入るとは思わなくて…………でも、急に帰ろうとする長澤も悪いと思うんだ」

「……長谷部が変な事言うからでしょう」

「変な事……あ××んのこと？」

「わあああああ！」

この人はもう！

「長谷部は一応女性なんですから！公然の前でそんな言葉使っちゃいけません！」

「……一応じゃなくて、ちゃんと女なんだけど」
「だったら尚更です！」

何で僕がこんなお小言を言わなきゃいけないんだ。
これじゃあ、まるで長谷部の母親みたいじゃないか。

「私、思っんだ」

「……何をです」

「男が猥談するように、女だって猥談する。ただ、女の場合、男より秘匿性を高くする。そしてなにより、猥談は同性同士間行うのが通例！」

「……」

「今は、男女平等社会。性差別はよくない。別に男女混合で猥談をしてもいいと思う！」

……何を言っているんだ、コイツは。

「だから、女だから言っちゃ駄目とか言うのは良くないと思うんだ！」

拳を握り締めて力説しているけど、意味不明で訳が分からなかった。

「……えっと、つまり長谷部は何が言いたい訳？」

「女の子が別にエロいことを発言してもいいと思います！」

それは……どうなんだろう。

うん、個人の自由だし。いいんじゃないかな。引くけど。絶対引くけど。

「そうですか」

「……あれ、リアクション薄いよ？」

「もう色々と……諦めましたから」

ハハ……と、遠く空を見上げた。

もう、長谷部の変な発言を止めるのを諦めてしまった。
僕がいちいち反応するから、からかってくるんだ。

「私は、いつでも長澤を受け入れる用意はあるよ！」

長谷部は両手を広げていた。

「……知りません」

「さあ！」

「……」

「さあ！」

「……」

それは、僕に長谷部の胸に飛び込めってことなのか？

そーなのかー？

いやいや、おかしいでしょうが流れ的に。

どうしてこうなった……！

「さあ！」

「……………」

僕は意を決して、長谷部が両手を広げる所に、ゆっくりと歩を進める。

僕が歩を一步進める度に、長谷部の顔がだらしなく弛んでいく。それが無性にムカついた。

そして、後一步進めば長谷部の射程圏という手前で止まり、深呼吸。

「…………ふう」

決意の一步。

長谷部が僕を抱きしめようと腕を閉じようとするよりも早く！

踏み出した一步を利用して、捻った腰はバネのごとく。その力をこの右ストレートに全てを賭ける！

「ふっ！」

短く息を吐き、右ストレートを長谷部のお腹に叩き込んだ。

「ぎゃふ！」

長谷部は僕を抱き締めることなく倒れ込んだ。

それでも、手に持っていたバスケットは大切に守っていた。

「お、お腹……子宮があるからそこは止めて……は子供が産めなくなる」

まだ減らず口を言う余裕があるようだ。

案外、しぶとい。

「……私は、長澤を抱き締めるにはまだ早いということなのか……」
少しやりすぎたかと思ったけど、思ったより大丈夫そうだ。
僕の中では、長谷部はこんな見境のない変態さんじゃなかったのに、
絶賛暴落中でストップ安だ。

「それにしても長澤。レディを殴るとは何事か。少しは手輕をだね
——」

「いえ、男女平等社会なんで、男を殴る勢いでやりました」

「私はこんなつもりで男女平等を言っただけじゃない！」

長谷部がくわつと目を見開いて言った。

「……もういいです」

やっぱり、長谷部の考えていることがよくわからない。

七話（後書き）

長谷部の口調が定まりません。

そして、無駄にエロ人間になってきています。こんなはずじゃなかったのに。

ホントは、しっかりしているけどちょっと変態な程度なはずが……

ああ、本性現したのか。

八話（前書き）

始めちよいラブコメ終わりシリアス。
落差が急です。跳ねっ返りにご注意ください。

八話

こうやって、僕と長谷部は他愛もないお話をしていると、いつしか時間はお昼を指していた。

「……お腹、すきましたね」

僕がポツリと言った言葉に、長谷部は目ざとく反応し、僕の目の前にバスケットを差し出した。

「ふっふん。だったら、この愛妻弁当を食べればいいじゃない！」
「……ああ、お弁当だったんですか。それ」

道理で、長谷部が大切に持っていたわけだ。
雑に扱うと、お弁当の中身が滅茶苦茶になってしまう。

「とりあえず、あそこのベンチで食べよう。少し遊び疲れた」
「……そうですね」

僕と長谷部はベンチに座る。
長谷部が、バスケットを開く。

「さあ、刮目せよ！」

自信満々に出してきたのは、何の変哲もないただのサンドイッチ。
普通。ノーマル。

卵、ハム、カツ、トマト、レタス……。
挟まっているものも色々で、色鮮やか。見た目は普通に美味しそう。

「ささ、食べてみて」

長谷部に手渡されたのはハムサンド。ハムとレタスとトマトが挟ま
っている。

僕は、素直に一口食べてみた。

長谷部が期待のまなざしで、僕が食べるのを見ていた。

「……普通ですね。普通に美味しいです」

すると、長谷部は微妙そうな顔をした。

「喜んでいいの？それ」

「いいと思いますよ。美味しいと言ってますから」
「そっか」

長谷部は嬉しそうに笑った。

少し照れが入っているのか、ちょっと恥ずかしそうだ。

「私ってさ。料理とかしないから心配だったんだ」

つまり、僕は毒味をさせられたわけだ。

「料理なんて、凝りさえしなければ難しいものじゃありませんよ？」

「え、料理できるんだ」

「まあ、出来ますよ。お味噌汁とか一通りなものは」

すると、長谷部はサンドイッチをくわえたまま、僕の方をジッと見
ていた。

何だか視線がむず痒い。

「な、なんですか？」

「……お嫁にください」
「ふえっ!？」

お、お嫁!？

婿じゃなくて？

そもそも、そういう関係でもない。
というか、僕は男だ。

「ど、どうしたんですか？そんな冗談を……」

「私は至って真面目だ」

「だったらおかしいでしょう！僕がなんでお嫁なんですか！」

「……私が働いて稼ぐから、主夫になつてと言ふことだよ」

「それは——むぐっ」

僕の口にサンドイッチを押し込められて、黙らされる。

押し込んだ本人の長谷部は楽しそうに笑っていた。口の中に、マヨネーズで味付けされた卵の味わいが広がる。
コレステロールが高すぎないだろうか。

「おしゃべりばかりで、食が進んでないね？」

そういう長谷部もだと思ふ。

だから僕は、適当なサンドイッチを手にとつと、おしゃべりのすぎる長谷部の口に押し込んだ。

「むぎゅ」

面白い声をあげ、長谷部は目を白黒させて驚いていた。
ざまあみろ。

少し、心がすっきりした。

僕達は、その後も他愛もないことを話したりして、長谷部が作ってきたサンドイッチを美味しくいただいた。

●

お昼を食べた後、僕と長谷部はそのまま百年の森しばらくいた。と言っても、百年の森はただ少し広場になっているくらいで、木が生い茂る森しなくなてすることもない。

長谷部はそれも見越していたらしく、長谷部の持ってきていたフリスビーで少し遊んだ。

僕がフリスビーを投げれば、あらぬ方向に飛んでいって、それを追いかけて長谷部が自慢の健脚を披露して、見事にキャッチをしてみせる。

まるで、犬にフリスビーを投げているみたいだった。

でも、流石の長谷部も走りっぱなしは疲れてきてしまったようで、二人で木にもたれて木陰で休んでいる。

梅雨の時期にしては、涼しげな風が吹き抜けていて心地がよい。そんな時、僕の膝に軽い衝撃を感じた。

「……長谷部？」

僕の膝に、長谷部の頭が乗っかっていた。どうやら、長谷部が寝転んだようだ。

「長谷部、重い」

しかし、返ってくる言葉はない。ただ、小さな息の音が聞こえる。

「……………」

もしかして、寝てる？

僕は、長谷部の顔を覗き込んだ。

「…………寝てる」

長谷部は目を閉じて、気持ちよさそうに眠っていた。
せつかなので、そのまま寝かしてあげることにした。

僕は長谷部に膝枕をしたまま動けない。

思わず苦笑い。

自然と、僕は長谷部の髪を撫でていた。

しばらく長谷部の髪を撫でていると、ふと、バスケットの中に見覚えのある本を見つけた。

一冊の本。

長谷部が文芸部に入部した時に、僕が渡したオススメの本だ。

長谷部が一度も読んでいる姿を見たことはないけど、どうやら一応は読んでいるみたいだった。
しおりが挟んである。

「……………」

僕は、その本を手に取り開いてみる。

少し汚れていたけど、記憶の通りだ。

久し振りに読んでみたけど、やっぱり面白い。

「もう一度読みますか」

僕は、長谷部を膝枕しながら本を読み始めた。

結局、僕が読み終わっても、長谷部は寝たままだった。
日も沈み始めている。
流石に、もう起こさないといけない。

「長谷部」

僕は、長谷部の体を揺する。

「起きてください。もう帰りましょう」
「……うん」

パチリと、長谷部が目を覚ました。
ぼんやりと、僕の顔を眺めてくる。
寝ぼけているのだろうか。僕はいつまで膝枕をすればいい。

「……おはよ」
「おはようございます。でも、今は夕方ですよ」
「夕方？」

そこで、長谷部は寝ぼけていた頭が冴え渡ったのか、急に起き上がった。

「そうだ！デートだったんだ！ああ、寝ちゃったよ」
「気持ちよさそうに寝てましたよ？」
「うう……寝顔みられた……」

何を今更、長谷部の寝顔なんて結構見ている。
部室ではよく寝ているし。

「というか、膝枕されていた！？うわっ、なんか凄い恥ずかしい！」
「落ち着け」

僕は、パニックを起こす長谷部に、頭をチョップして静かにさせる。

「とにかく帰りましょう。もう日が暮れます」

「う、うん。そうだね」

「それに……」

僕は、少し前とは様子の違う空を見上げた。
どんよりと、黒い雲が立ちこめ始めていた。

「雨が降るかもしれませんね」

●

「さようなら」

「また学校で」

僕と長谷部は駅で別れた。

どうやら、長谷部はこのところがあるらしく、駅の中に消えて
いった。

電車に乗って、姫井市の市街地にも行くんだろう。

空を見上げれば、今にも降り出しそうなどんよりとした雲。お昼の
頃とは大違い。

傘を持っていない今、降ってこられると厄介なので、いつもより早
歩きで家路を急ぐ。

遠くの方で雷の音も聞こえた。

「ただいま帰り……ま……し……た……」

家に入るといつもより雰囲気が違う。しかも、悪い意味でもしかしたら、仕事をほっぽりだしたからかもしれない。

これは、制裁を覚悟しないといけない。

僕はおどとリビングに入る。

すると母親様が珍しくテレビも観ずに、ソファーにただ座っていた。

「……今すぐ荷物を纏めなさい」

「えっ……」

一瞬、何を言っているのか分からなかった。

「今すぐ荷物を纏めろって言っているの」

「な、なんですか」

「要らないから」

茫然。

自分の体に雷が落ちたような衝撃が走った。

実際に、雷で空が光っているみたいだったけど、そんなことを気にする余裕もない。

「仕事をしない使いは要らない。だから、養子縁組みを解いたから」

これ、書類と、母親様は僕の眼前に突き出した。

僕の名前が消えていて、もう一つには苗字が変わった……いや、元に戻った僕の名前。

冬川 優希という名前。

「とりあえず、今すぐ出て行って。赤の他人なんだから」

「そんなつ、僕に行くところなんか……」

「そんなの知らないわよ」

ああ、なんてことだ。

僕には元から帰るところなんてない。

今、追い出されてしまえば、辿り着く先は……。

僕は、なんでこんなにも邪魔者扱いされるんだろう。

学校でも、引き取られた家庭でも、産んだ親にも……。

僕は、居てはいけなかったの？

「何ぐずぐずしているの、早く荷物を纏めなさい！」

「……はい」

流れそうになる涙を必死にこらえ、僕は屋根裏に向かった。
泣いたら、負けだ。

「……くう」

それでも、やっぱり自分の不遇さに天を恨みそうになる。
元より僕の持ち物は少ない。

数冊の小説本を大きなリュックに入れて、数少ない服は圧縮してしまえば入ってしまった。

大きなリュックと、ショルダーバック。

その二つだけで、僕の持ち物は全て入ってしまった。

これには、僕も驚いた。

「とっとと出て行きなさい。もう二度と来ないでよ」

そう言われ、鬼のような母親様と嫌らしい笑みを浮かべた糞兄貴に見送られながら、僕は蹴り出されるように追い出された。

なんという急展開。朝には想像出来なかった事態。

長澤改め、冬川 優希は家無き子となってしまうた。

特に行く宛もなく、ぶらぶらと歩く。

足が重い。
かつて過ごした孤児院に戻ろうかと思って思ったけど、去年の手紙に、不景気の煽りを受けて潰れることになったと書いていたことを思い出した。

「……最悪」

頼る所も、人も、誰も何もない。

でも、僕は今まで一人で生きてきた。経済的には無理だったけど、やっぱりそれでも僕は生きてきた。

誰も頼らなくとも生きていける……。

そうやって、僕は自分に言い聞かせるけど、心が晴れることはなかった。

まるで、今の空模様。

「ほんと、どうしよう……」

部屋を借りようにも、お金が掛かる。

残念なことに、僕のバイト代は母親様に奪われており、有るのは昇給分をちよるまかして貯めてきた僅かのみ。

到底、借りることのできる部屋なんてない。

野宿。ダンボール生活。軒下暮らし。雨風しのげたらどこでもいい……。

取り留めもなく、考えながら歩いていたら、気付けば朝に長谷部と一度来た公園に立っていた。

「……………」

もう、考えることにも疲れた。

色々と受けたショックが大きすぎて、長年抑え込んできた僕の感情が制御し辛くなっていた。

ポツリポツリと雨が遂に降り出し、本降りとなって僕の身体を濡らした。

冷えていく身体。僕は天を仰ぎ見てら、そして呪った。

何故、僕はこんな目に遭っている。

何故、本当の親は僕を捨てた。

何故、僕を産んだ。

僕は……見捨てられたんだ。

そんな事、分かっていた。だから、僕は一人で生きて、生きようとしてきたんじゃないか。

そんなこと、今更なのに……どうして

「涙が出るんだよ」

背負っているリュックを地面に落とす。

雨で水溜まりになっていたけど気にしない。もう既に濡れてしまっている。

梅雨時期の雨は鬱陶しいけれど、今だけはこの雨に感謝した。

泣いていても、雨と涙が区別が付かない。

僕はしばらく、ひっそりと泣き続けた。

八話（後書き）

……十話で終わらない。

寄り道しすぎました。

なんとかしようとした結果がこれだよ。

プロットのようなぶつ切りだよ。もっとちゃんと書きたかったんだよ。

長谷部の一人きやつきやつうふふに優希を突っ込ませたいんだよ……。

長谷部の変態ぶりを書くこうとして、こっちが恥ずかしくなって書きなおして、そしたら今度は別にそうでもないような感じになるし……。

長谷部のキャラクターは使い易いけど不向きかなあ。

どうしてくれようか。

まあ、次からシリアスばっかりの予定だから別にいいか。

今年までには終わらせたいです。

九話（前書き）

やっぱ今月中には完結できないや……。

九話

その日、私は突然の雨の中帰路に就いていた。

テレビ局で収録を終えて、マネージャーさんに車で送ってもらっていた。

ぼんやりと、流れていく景色を眺めて憂鬱な感傷に浸っていた。

最近、仕事がうまくいっていない。今日もつまらないミスをして怒られてしまった。

頑張って勉強して入った高校だって、何だか楽しくなくて行きたくない。

みんなは良くしてくれる。でも、贅沢な話だけどその取り巻きが鬱陶しい。

まるで、遅れてやってきた五月病のように、やることなすこと身に入らなかった。

ビルが建ち並んだ景色から、いつの間にか所々に田園風景が広がる郊外にまでできていた。

もうすぐ、家につく。

近くの公園を通りかかったときだった。

「——っ！止めて！」

私はある姿を見かけて、マネージャーに車を止めさせた。

降りしきる雨の中、私は傘もささず飛び出した。

マネージャーが何か言っていたけど、私は一目散に走っていった。

私の見間違いないかなかったら、あの姿はゆー君だ。

でも、何でこんな雨の中を傘もささずに立っていたのだろう。

私の心の中に、黒いもやがかかったようだった。

「――ゆー君」

やっぱり、ゆー君だった。

表情は分からないけど、空を見上げていた。

既に体が冷え切っているみたいで、6月でありながらゆー君の吐く息は白い。

「……佐山……さん、ですか」

「こんなところでどうしたの！一体なにが！」

「関係……ない……です」

「関係なくはないよ。とにかく、お家に帰ろう」

私は、ゆー君を車が停まっている所まで引っ張ろうとした。
でも、ゆー君は動かない。

「ゆー君……？」

傘をさしたマネージャーが走って私達の方にやってくる。

「帰ろう。風邪ひくよ？」

マネージャーが私を傘に入れてくれた。でも、今は私よりゆー君を
いれてあげて欲しかった。

「車で送るから……ねっ、マネージャー」

「ええ……」

それでも、ゆー君は空を黙って見上げているだけだった。

ゆー君の頬を、水滴が流れていく。

……もしかして、泣いている？

「……放って置いてくれませんか」

ポツリ。ゆー君は呟いた。

「放って置けないよ。こんな冷たい雨の中。風邪引いちゃうよ？だから帰ろう？」

「帰るってどこに」

「そりゃ、長澤の——」

「ふざけないでください！」

いきなりの大きな声に私は驚いた。
ゆー君は私を鋭い視線で射抜く。

「僕は追い出されたんです！」

「……えっ」

「養子縁組みを解消されたんですよ。僕にはもう……帰る所なんて……ありません」

何も、言えなかった。言葉が見つからなかった。

テンプレートな気休めの言葉なんて、何の意味もない。

拳を握りしめて、必死に何かを堪えているゆー君を見ると、可哀想とか安い言葉は私には言えなかった。

だから、私は行動で表した。

震えているゆー君の冷えた体を、私は正面から抱き締めた。
とても冷たい。そして恥ずかしい。でも、今はそういう時じゃない。

「大丈夫」

「……」

「大丈夫だから。一人じゃないから。私がついているから」

「……っ」

「辛かったね。大変だったね。頑張ってきたね」「……っ」

「もう、大丈夫だから。だから、少しは気を許してもいいんじゃないかな」

「……あ」

「泣いても、いいんだよ」

その瞬間、ゆー君の十年間くらいの涙が溢れ出た。

今まで、私の知る限りゆー君は人前では泣かなかった。

だからきつと、今までの溜まっていたものが噴き出したんだと思う。

私はただ、腕の中で泣くゆー君を抱き締めていた。

●

恥ずかしい。

恥ずかしすぎる。

穴があつたら全力で埋まりたいぐらい恥ずかしい。

いい歳して、思いつき泣いてしまった。

しかも、知り合いの女の子の抱き締められて。

思いつき泣いたからだろうか、さっきまでネガティブ一直線でまるで自殺しそうな勢いで陰鬱とした心境だったけれども、今はすっきりとして気持ち軽くなったようだった。

「ゆー君？」

「あつ、うん。もう大丈夫。落ち着いた。ごめんなさい」

「そう、良かった」

「うん、だから離してくれませんかねえ」

そう、僕はまだ佐山に抱き締められていた。

恥ずかしい。なにより恥ずかしい。

スゴく当たっているんですよ。胸とか胸とか。

降っている雨が、顔に当たった瞬間水蒸気になるんじゃないかと思うくらい、顔が熱い。

「やだ」

「うえっ、何で？」

思ったより強く抱き締められて、抜け出すことは出来ない。

佐山の温かな体温が伝わってくるのが、余計に恥ずかしさを増していた。

「だって、ゆう君の身体冷えているんだもん。温めないと」

佐山はさらに強く、僕を抱き締めてきた。

確かに佐山の体温は温かく感じる。つまり、僕の方が体温は低い。冷たい雨の中、佐山は僕の身体を冷たく感じるはずなのに、抱き締めているんだ。

「あの、とにかく車に戻りましょう。このままだったら二人とも風邪引きます」

確かにその通りだ。

僕は佐山が乗ってきたという車に便乗させてもらうことになった。どうやら、撮影の帰りに偶然僕を見かけたらしい。

マネージャーさんだという女の人がそう言っていた。

「どうします。このまま送りましょうか」

車の中。濡れ鼠の状態でシートを汚す羽目になって申し訳ないと思われるっていると、マネージャーさんがそう言ってタオルを渡してきた。

「あ、僕帰る家ないんで、近く駅にでも降ろしていただければ……」

僕は受けとったタオルで、濡れた頭を拭く。
濡れてへばり付く服が気持ち悪い。

「そこからどうするんです」

「あゝ、しばらくはネットカフェ……ですかね。一応、バイトして
るんである程度収入は見込めますし……」

実のところ、バイト先にでもちゃっかり住み込んでやろうとも思っ
ている。

あの店長なら、普通に許可をくれそうだし。

「あのさ、だったら私の家に居ればいいよ」

「……えっ」

佐山の言った言葉に驚いた。

そんな事、許されるはずがない。

もし、週刊誌にでもすっぱ抜かれたらどうするつもりなんだ。

「悪いよ。そんな……。僕のことなら、大丈夫だから」

「でも、それじゃあゆー君はどこにも……」

「いいんです。よそ様に余り迷惑はかけませんから」

誰かの迷惑にかかることはしたくない。

だから、僕は佐山の誘いを断った。

佐山は不満があるのか不機嫌そうに目を細めた。

マネージャーさんも、何とも言えないというような表情を浮かべて
いる。

「マネージャー、私の家まで送ってください。二人共そこで降ります」

「え、ちょっと——」

「分かりました」

すると、軽やかに車は発進した。

どうやら、今流行りのハイブリッドカーらしい。

とても静かでエンジンがかかっていたことに気付かなかった。

……いや、そうじゃなくて。

「何で勝手にきめ——」

「ふざけないで！」

佐山とは思えない大きな声に、僕はびくりと体を震わせた。

「何で……？勝手……？ゆー君の方こそ勝手に決めつけないでよ！」

こんな感情的な佐山は、見たことがない。

「迷惑なんて……私は迷惑なんて思っていない。きっと母さんだつてそうだよ」

「でも——」

「でもストもないよ。それに、ゆー君はよそ様でもないんだから……」

優しく、そう諭してくる佐山の言葉に、胸が熱くなった。

こんな優しさを、僕はどうすればいいんだろう。

今までにないこの優しさを、どうやって受け入れるのか、そのすべてを僕は分らなかった。

「……僕は」

「そんな悩む必要ないわよ。単なる下宿って考えればいいの」
「えっ」

車を運転するマネージャーさんが言った。

「深刻に考えすぎなのよ。別にずっと住む訳じゃないんだろっし、自分が許せないんだったら、少しお金を払えばいいじゃない」

バイトはしてるんでしょ、と言うマネージャーさんの言葉に、僕は頷いた。

そうか、確かにもっともだ。

僕は深く考えすぎていたんだ。

「ゆー君……」

「心配かけている方が、よっぽど迷惑とおもうけど」

「……そうですね。すみませんでした」

チツチツと、マネージャーさんは指を振る。

「もっと言うことがあるじゃない」

「……………」

ああ、そうか。

「……………」
「ありがとう」

小さく、僕は呟いた。

●

佐山の言った通り、佐山の母さんは僕を快く上げてくれた。びしょ濡れの状態の僕と佐山を見た時は、驚愕の表情を浮かべていたけど。

「……はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

出されたココアは温かく、とても甘かった。

冷えていた体が、芯から温まる。

濡れていた服は、着替えて今は洗濯乾燥機の中で回っている。持っていた衣類を圧縮袋に入れていて、本当に良かった。

賢沢言えばシャワー位は浴びたいものだが、他人の家で勝手には出来ないし、第一、佐山が今使っている。

僕は乾いたタオルで充分だ。

「夏帆が上がったら、優希くんがシャワー浴びなさい」

「あ、いえ……僕なら大丈夫なんで」

「そんな事言って……風邪引くわよ」

佐山の母さんは、にこやかに笑いながら僕の対面に座った。

僕の顔をじっと見て来るもので、非常に落ち着かない。

僕はマグカップで顔を隠すようにして、ココアを飲んだ。

「……久し振りね」

「……そうですね。小学校以来かと」

「夏帆が芸能界に入って疎遠になったのよねえ」

中学も違うし、接点もなくなって、違う世界に行ってしまったのだ

から仕方がない。

こうやって、また家にお邪魔させてもらっていること事態、僕には驚きだった。

「夏帆からも聞いていたけど、変わったわね」

「……それなりの年が経ってますんで」

時が経てば人は変わるものだ。
外見しかり、その中身も。

「昔はもつと笑っていて、そんな他人行儀な言葉じゃなかったのに」
「昔とは色々と違いますから」

立場とか。世界とか。

そう言うのと、佐山の母さんは少し寂しそうな表情を浮かべた。

「別に遠慮しなくていいのよ？ 知った間柄なんだし、昔のようにしてくれて」

「……………」

そうはいかない。

昔と今は違うんだ。

遠慮とかそんな事じゃない。住む次元、世界が違うんだ。

佐山の母さんが、僕の事を変わったと言うように、佐山家も僕にとっては昔と変わってしまったっているんだ。

だから、昔のようになって、到底無理な話だ。

「ふう、温まったあ」

体からホカホカと湯気を上げた佐山が入ってきた。

「ゆう君、お待たせ。シャワー浴びてきて」

「……有り難く頂きます」

僕はそう言つて、そそくさとシャワーを浴びに行った。

●

優希がシャワーを浴びに行つて、残されたのは夏帆とその母親。

夏帆は、優希が座つていた場所に座ると、マグカップに入ったココアが存在に気がついた。

まだ、湯気が出ていて温かそうだ。

「いただきます」

「あ、それ」

夏帆がくいつとココアを飲む。

甘味が口の中を満たしていく。いつもより、何だか甘い気がした。

「あゝ飲んじやつた」

母親がやつちやつたといった感じにいう。少し、口元が笑っている。

「なに、母さん？」

更に、夏帆はココアを口に含む。

「それ、優希の飲みさし」

「~~~~~っ!」

夏帆が飲んでいたココアを嘔き、更に咽せた。
ただそれだけ。

九話（後書き）

気付いたらお気に入り登録が……。

ちゃんとして書いてから出せば良かった。

もう少しで完結ですよ。

予定では後三話。または四話。

予想外に佐山 夏帆と言うキャラクターの立ち位置が難しい。

佐山 夏帆と言うキャラクターの書きたい部分が、まだ半分くらい残っている。

どうしよう……。

十話（前書き）

長くなりました。

十話

捨てる神あれば拾う神あり。

昔の人はよく言ったものだと思う。

なにせ、僕の状況を言い表すのに、まさに的を射た言葉だからだ。
結局のところだ。

佐山の母さんと父さんを前に事情を話せば、なんと快く了承してくれたのだ。

流れはこうだ。

「ゆー君、家追い出されちゃったんだって。家に住まわしてあげて」

「おーいいぞ」

「あら、いいに決まってるじゃない」

終わり。

嘘かと思うけど本当だ。

僕自身、自分の目と耳を疑った。

重大案件をこうも簡単に決めてしまった佐山家が未恐ろしい。

佐山の父さんに限っては、ビール片手にほろ酔い状態での快諾だ。
大丈夫だろうか。この一家。

きつと、こんな流れで佐山の芸能界入りとかも決めたんだろう。
一抹の不安を抱きつつ、軽い流れで僕の佐山家居候が決定した。

「さあ、これでも食べて」

「あ、どうもありがとうございます」

「ゆー君、これあげる」

「え、あつ……」

「コラ、夏帆！自分の嫌いなものを優希くんに渡すんじゃないませ
ん」

「好き嫌いはよくないぞ」

「ええ」

「……………」

僕は非常に戸惑っていた。

朝。起きてみればすでに朝食が出来ていて、かつ、僕の分まで用意されていて、しかも、それがパンの耳とじゃないちゃんとした朝食だった。

さらに、同じ食卓で食べることが出来て、満足の量を食べられる。今までにはなかった事だ。

それ故に、戸惑っていた。どうすればいいのかわからない。

長澤の家では、ずっと一人で食べていたし、学校でもはぶられているから一人。いや、まあ、最近長谷部がたまにやってきて食べたりするけど……二人以上食卓を囲むと言うのは初めてだ。とても新鮮だった。

「そうだった！」

佐山がトーストをかじった時だった。突然何かを思い出す。

「ゆー君！」

「……なんですか、佐山さん」

顔が近い。近い近い。

「それ！」

「……は？」

それ！と言って僕の顔を指指されても困る。

もしかして、トーストのパンクズが頬にでも付いているのか？

「呼び方！私の！」

「佐山さん……ですか？」

それがどうしたと言うのだ。間違っではなかるう。

「他人行儀すぎるよ、その呼び方。昔みたいに呼んでよ！」

……まあ、他人っちゃん他人だし。幼なじみだけど。

第一、最近まで長らく会ってもなかったし、今になって昔みたいに呼べっていったって、ちよつと無理があると思う。

……いや、待て。僕は昔佐山のことをなんて呼んでいた？

「……えつと、僕は昔、佐山をなんて呼んでいたっけ？」

「えゝつ、忘れたの?!」

「……すみません」

謝るけど反省はしていない。

ああ、久し振りに口にしたスクランブルエッグが美味。

「……なっちゃんだよ。そうゆー君は私を呼んでいた」

ああ、思い出した。

夏帆の夏の字をとって、なっちゃん。

確かにそう呼んでいた。

でも、今になってそう呼ぶのは勘弁してほしい。

「さっ、昔みたいに呼んでみて」

「……………」

勘弁してください。

「……………」

「さあ」

「……な」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………夏帆さん」

「はあ……………」

佐山がため息をついたけど、ため息をつきたいのは僕の方だ。
名前で呼んだだけマシだと思ってほしい。

「せめて……………さんを抜こうよ」

「……………夏帆……………さん」

「残念！」

そんな時だった。

——ぴんぽん

和気あいあいとする朝の食卓の最中に、来客を知らせる呼び鈴がなった。

「あら、誰かしら？」

「マネージャー……………にしては早すぎるし……………」

「夏帆、出てきて。母さん手が放せない」

「はあ……………」

パタパタとスリッパを鳴らしながら、佐山……………いや、夏帆は玄関に

向かって行った。

「……にい……！」

「……た……いつ……こう」

「でも……に……うから」

会話が聞こえる。

その声は聴いたことがある。

自然と心拍数が上がり、背中に嫌な汗をかく。
間違いない。奴だ。

「……ね……だよ」

「べつ……か……こ……ぜ」

何やら揉めている。

パタパタとスリッパを鳴らし、夏帆が戻ってきた。

「……カズ兄がきた」

「……やっぱりそうでしたか」

ついに、糞兄貴が動いたようだ。

邪魔者な僕が消えたからなんだろう。

「私と学校一緒に行こうって……私、マネージャーに送ってもらって
るのだけ……」

「だったら断ればいいじゃないですか」

「断ったんだけどね……」

ははは、と夏帆は苦笑した。

やはりあの糞兄貴、迷惑をかけているようだ。

かといって、僕にはなにもできない。

もし、僕の存在にあの糞兄貴が気付いたら、一体何をするか……考えたらずが震えてくる。

「諦めないんですか？」

「うん。マネージャーの車に同行したいって」

それはまたなんと厚かましい。

しかし、このままではあの糞兄貴は佐山家に上がり込んでくるだろう。

「今、カズ兄には外で待ってもらっているんだけど……」

「分かりました。僕は今すぐ裏口から学校に行きます」

早々に食事を切り上げ、僕は食卓の場から立つ。

「裏口は台所の横よ」

「分かりました。ありがとうございます」

ふと、気付く。

靴どうしよう。玄関にあるけど取りにいけない。

学校の鞆は事前に準備して持ってきているけど、どうしよう。

「ほら、優希くん。靴だ」

「あっ」

佐山の父さんが、空気呼んだように靴を持って来てくれた。

「ありがとうございます」

僕は頭を下げる。

「いいんだよ。気をつけてな」

「いつてらっしゃい」

「……はい！」

僕は裏口からこっそり出て行った。

●

誰もいない教室。

聞こえるのは朝練をしている運動部員達の声。
静かだ。

こんな落ち着いた日は久しぶりだ。

学校側には、僕の苗字が変わった事を伝えた。

今日にでもその事がクラスに伝えられるだろう。

しばらくは奇異の目で見られるかもしれないけど我慢だ。

僕は、持ってきている小説を読み始めた。

パラパラと紙を捲る音が教室を支配する。

しばらく時間経つと、誰かが教室に入ってきた。

「……げっ」

その入ってきた女子生徒は、僕の姿を確認すると露骨に顔を歪めた。
全く、嫌われたものだ。

その女子生徒は、つかつかと歩いてくると、僕の前の席に座った。
特に興味がないので、僕は小説を読み進める。

この学校では僕は嫌われ者だし、今更僕が他人にどうこう思われて
いようが別に構わない。

必然的に、会話なんてあるわけなかった。

「……………」
「……………」
「あゝ、そのさあ」「……………」
「おい………」
「……………」
「……聞けよ！」

バンと、僕の机が叩かれた。

驚いて顔を上げると、前の席の女子生徒がこちらを睨んでいた。

「……なんですか？」
「なんですかじゃねえよ。声掛けたんだから反応しろよ！」
「はあ、すみません」

はて、全く気付かなかった。

「それで、何か」
「あ、いや……特には無いんだけどな………」

なるほど、呼んでみただけとか言う嫌がらせか。

「……そう」

僕は再び小説に目を戻そうとした。

「いやいや、ちょっと待て。あるぞ、聞きたいことが」

女子生徒は僕の机をドンドンと叩く。
なんて乱暴な人なんだ。机が壊れる。

「お前、深春のことどう思ってる」

「深春？」

はてさて、一体誰のことだったかな。
少し頭をひねって思い出す。

「ああ、長谷部の事ですか。いい人だと思ってますよ」
「いや、そういうじゃない」

彼女が言いたいことが分からない。
がしがしと頭を掻く彼女は、まさにガサツっぽかった。髪型が乱れている。黙っていれば、多分美人なのに。

「深春の事、好きなのかってことだ」

長谷部の事が好きか。
どうだろう。

人としては嫌いじゃない。でも、恋愛感情となると別だ。
第一、恋愛感情と言うものが分からないからどうとも言えない。
それにだ。

「……そんな事、君に言う必要あるとは思えないけど」

これに尽きる。

誰と知らぬ人にそんな事を言わねばならない。

「深春とは昔馴染みだからな。アイツが夢中になるお前がどういう奴か知る必要があるだろ。まあ、大体はクラスの奴らから話は聞いているし……同クラスだけだな」

ああ、コイツもやっぱり同じだ。
何の確証もないのに、ただクラスの一部が吐く妄言を信じる。
どうせ、ろくでもないことを耳にしているのだろつ。

「単刀直入に言う。深春を弄ぶのはやめろ」
「……は？」

弄ぶ？
僕が？
長谷部を？

「何の冗談ですか」
「ふざけんなっ！」

大きな音をたてて机を叩き、睨みつけて威嚇してくる。

「お前が深春を無理やり部員にしたり、こき使ったり、セクハラしたりしてるんだろ！」
「……そんな話になってたんだ」

全くのデタラメ。
寧ろ真逆。

長谷部が勝手に部員になり、僕を振り回し、セクハラをやってくる。
でも、その事を僕が言っても目の前の彼女は信じないだろう。
だったら、何を言っても無駄だ。

「……僕は何もしてません」
「嘘をつくな！中学から深春は陸上部に入るって言っていたんだ。
それが急に文芸部なんかに入る訳ないだろ！」

それは……僕の知らないところで事が進んでいるので分からない。
でも、やっぱり長谷部は陸上部に入りたかったんだ……。
だったら、何故文芸部なんか……。

「てめえ、何か深春の弱点を握ってそれで脅しているんだろ。汚い奴だな」

……なんだ。この展開は。

僕が本当の事を言っても、何で悪役になるんだ？
やっぱり、思い込みがある人とは話が通じない。

僕はもう諦めて彼女を無視する事にした。

「おい、何とか言えよ」

「……………」

「……無視か」

それがどうした。

いつも君たちが僕にしていることじゃないか。

「てめえ、無視してんじゃねえよ！」

胸ぐらを掴まれる。

ぐっと顔を近付けられ、至近距離から睨み付けられている。

読んでいた小説が手から零れて床に落ちた。

迫力ある彼女の眼力。でも僕は目を逸らさずに、真っ直ぐ見据える。

「…………だからなんですか。あなた達が僕にやっていることじゃないですか」

「——っ！てめえ！」

「殴るんですか。その握り拳は」

胸ぐらを掴む右手の逆。左手が握り拳を作り、プルプルと震えている。

怒りで殴ろうとした衝動を抑えているようだ。

何故、事実を指摘しただけでどうして怒るのか。

「——くっ、殴らねーよ」

「そうですか」

「……くそ！」

彼女は言葉を吐き捨てて、僕の胸ぐらを離した。

「一体お前は……何なんだよ」

「……何なんだって言われても、困りますよ」

僕は落ちている本を拾うと、これ以上関わりたくないので静かに教室を出て行った。

●

朝っぱらから長谷部の幼なじみというクラスメイトに絡まれた今日。僕は休み時間の殆どを文芸部の部室で過ごすことになった。今日の教室は、いつも以上に居づらい。

僕の前の席から、尋常じゃないプレッシャーを感じるのだ。

正直、放課後になってこうやって解放されてホッとしている。

「……ふう」

「どうしたんだい？なんだかため息が多いけど」

「いえ、何でもありません」

どうも落ち着かない。

何だかモヤモヤした気持ちが心を支配していた。

頬杖について、だらしない表情で舐めるように僕を眺めている長谷部の視線のせいだろうか。

駄目だ。集中できない。

僕は静かに本を閉じた。

「……今日はもうおしまいにしましょう」

「えっ、早いな」

「なんだか集中できないんです」

僕は読んでいた本を部室の本棚にしまう。

「長谷部は本を読まないんですか。文芸部ですけど」

「んー、読書は苦手」

鞆を持って、僕と長谷部は部室を出る。

二人並んで廊下を歩く。

「だったらどうして文芸部なんかに……」

「それなら前にも言っただけ——」

「覚えてます。ですけど、本当は入りたい部活があったんでしょう」

「……別になかったよ」

「……嘘だ。きつと嘘だ。」

あの長谷部の幼なじみだという女子生徒が言っていた。長谷部は陸上部に入るつもりだったと……。

多分、その通りなんだろう。

でも、長谷部は文芸部に入った。

僕の為に。

そして、僕のせいで本当は入りたかった部活に入れなかった。ということは、僕という存在が、長谷部を間接的に縛っているということになるんじゃないだろうか。

だから、長谷部はその事を僕に気付かれないように、嘘を吐いたんじゃないだろうか。

そう僕は思うのだ。

「僕、言われたんですよ。長谷部は本当は陸上部に入りたがってたって」

「なっ！その事を一体誰から！」

「長谷部の幼なじみという女子生徒からです」

「あ、ああ。アイツか。そういうえば長澤と同クラスだったな。迂闊だった」

やっぱりそうだった。

「でも、私は長谷部の為に文芸部に入ったんだ。後悔はしてないよ」

そう言われても、何にもならない。

僕が、長谷部を文芸部に縛り付けていると実感してしまう。

「……今からでも遅くはありません。陸上部に入ればどうですか」
「長澤？」

「僕という存在は、長谷部を知らない内に文芸部に縛り付けていたようです。だから、僕の為なんかじゃなくて、自分の為に部活を選んでください」

僕は立ち止まって小さく頭を下げた。
その様子を長谷部は驚いて見ていた。しかし、直ぐに柔らかく微笑

むと、僕の頭をくしゃつと撫でた。

「だったら、私はもう一度文芸部に入部届けを出す。今は、自分の為に文芸部にいるようなものだから」

「長谷部……」

だつたらなんで本を読まないんですか……！

「だから、長澤は気にすることはない」

「……そうですか」

なんだか釈然としないけど、僕は納得することにした。

長谷部が、頭を撫でるついでにお尻を撫でてくる件については殴つていいだろうか。

下駄箱まで行っても撫でていたら殴つてやろうと思っていた時、ある事にフツと気付いた。

「そういえば、僕。養子縁組みを解消されて、家を追い出されたんです」

「……えっ」

僕のお尻を撫で回していた手が止まった。

「苗字が長澤から冬川に戻りましたので、よろしくお願いします」

僕は、長谷部が驚いている隙に、お尻を撫で回していた手を引き剥がす。

「いや、うん。それはわかったけど追い出されたって……じゃあ今はどこに？」

「あまり大きな声では言えませんが、佐山の家の下宿させていただいております」

「佐山つて、長澤……じゃない、冬川の幼なじみとか言う？」
「はい」

正直に答えると、長谷部は頭を抱えてしゃがみ込んだ。

「なんてこった！私はチャンスのみすみす逃した挙げ句、敵にいいところを持っていかれるなんて！」

「……チャンス？敵？」

悔しがって廊下をだんだんと叩く長谷部が分からない。
何をそんなに悔しがっているんだか。

「今からでも私の家に住まないか！」

「……えっと、いきなり言われても困ります」

僕は苦笑しながら下駄箱の靴を取る。
二人並んで学校を出る。

「週三くらいでいいからさ」

「意味分かりませんよ」

「私も冬川と一緒に住みたいだけだ」

「……なんかやらしいことでもしようと考えてません？」

「そんなことない！」

「……鼻の下伸びています」

「馬鹿な！」

長谷部はペタペタと自分の顔を探る。

「嘘です」

「……………」

「……何やましいこと考えているんですか」

「そんなことない」

白々しく目を逸らされた。

一体何を考えていたんだか。

そんな感じに、僕と長谷部がおしゃべりをしながら歩いて、校門を出たときだった。

「少しいいですか」

「はい？」

見知らぬ女性に声をかけられた。

キヤリアウーマン風。出来る女性といった典型的風貌。メガネがキラリと光る。

「長澤……優希さんでしたね」

「はい、そうですか……」

「現在は冬川 優希さん」

「……なに者だ」

長谷部が僕を守るようにして前を立つ。
ちよつと邪魔だ。

「……本当に陽奈乃にそっくり……」

「えっ」

「いえ、申し遅れました。私、こつという者です」

そついつて渡されたのは一枚のカード。

名刺。

「鹿島法律事務所、弁護士、鹿島 楓…… 弁護士の方ですか」

でも、なんで弁護士なんかが僕を……？

「あの…… 弁護士方がどうして僕に……」

「その事をお話するのはここではあれなんで、場所を移しましょう」

鹿島さんは、少しきつそうな印象とは正反対の、優しそうな笑顔を浮かべた。

十話（後書き）

感想を下さった方々。ありがとうございます。

そろそろ終盤です。

佐山さんは結局、いいとこなしで終わりそうです。

ちゃんと佐山さんのいいとこの予定はあったんですが、流れが変わりました。

書いてるとプロットが変わるなんてあることです。

後少しですが、駄文にお付き合いくださいませ。

十一話（前書き）

誤字脱字は気にしないでね！

十一話

「好きなもの選んで。私がお金は出すから」

僕は鹿島さんに連れられて、以前長谷部と来たことがあるメビウスリングという喫茶店に来ていた。

かく言う長谷部もなし崩し的に僕に同伴しているのだけど。

「……ミルクティーで」

「コーヒーとチョコレートパフェで」

「じゃあ、私もコーヒーをお願いします」

……長谷部は少し遠慮というか自重した方がいいと思う。

なにチョコレートパフェなんか頼んでいるんだ。

僕も食べたかった。

「さて、優希くん」

「あ、はい」

「話というのは君の生まれについてだ」

「——っ！」

感情が爆発しそうだった。

今更なんだ知りたくもないという想いと、それでも知りたいと相反する想い。

心がごっちゃんになりそうだった。

「冬川……」

「……大丈夫です」

僕はキュツと長谷部の手を握った。

そうすると何だか落ち着く気がしたからだ。

「……それで、僕の両親はどうして僕を捨てたのですか」

「それはちよつと違うわ」

あなたは捨てられてなんかいない。

●

今から十六年前。

ある屋敷に、一人の少女がいました。

彼女の名前は、冬川 陽奈乃。高校に上がったばかりの15歳でした。

彼女は、資産家の娘として生まれ、お嬢様として育てられました。その儚さを感じさせる美貌は、まさに深窓の美少女という姿でした。そして、男女関係なく誰にも隔たりのない優しさと、少々おてんばながら裏表のない性格は、誰からも愛されていました。

しかし、彼女は生まれつきとても体が弱く、余り学校にも行くことができず、外にも出ることも余りありませんでした。

そんなある日。彼女に悪夢が訪れます。

その日は大変体調がよく、学校の授業も午前中のみという半ドンだったので、帰りに彼女は友人と待ち合わせて遊ぶことにしました。少し暑い季節ということもあって、待ち合わせ場所は日陰の多い近くの神社でした。

張り切っていたこともあり、待ち合わせ場所に早く着きすぎた彼女は、しばらく友人を待っていました。

すると、一人のスーツ姿の男性がやってきました。

その男性の目は血走っており、まるで飢えた獣のようでした。

そして、彼女を見つけた男性は、その醜い欲望をさらけ出し、彼女に襲いかかりました。

地面に倒され、

衣服を裂かれ、

白い肌を弄ばれ、

身体を撚られ、

純潔を散らされ、

そして、彼女は男性に醜い欲望を吐き出されました。

彼女はレイプされたのです。

もとより体の弱かった彼女は、これをきっかけに一気に体を崩していきました。

彼女をレイプした犯人は直ぐに捕まりましたが、精神を病んでいたということでは不起訴処分とされてしまいます。

そんな時、彼女の妊娠が発覚しました。

どう考えても、男に襲われた時の子供でした。

彼女の両親はすぐに中絶をするように言いましたが、彼女は首を横に振りました。

彼女は産むと決意していたのです。

しかし、それは大きなリスクがありました。

出産にはまだ彼女が若すぎるということもありますが、元より体の弱い彼女です。今は体調を崩して病院のベッドの上でした。

出産という大仕事に、彼女の体が耐えきれないようには見えませんが

した。

それでも、医師や両親が説得をしても、彼女は頑なに首を縦に振ることはありませんでした。

そして、月日は過ぎていき、お腹の赤ちゃんの経過は順調でした。しかし、彼女は日に日に弱っていくのが分かりました。

ついに、その日がやってきました。

今までの衰弱が嘘のような万全な体調で、彼女は出産に挑みます。

長い長い時間を経て、彼女は一人の赤ちゃんを出産します。産まれたのは男の子でした。

周りの人たちは複雑な心境で祝います。

しかし、当の彼女は嬉しそうに、優しく産まれたばかりの子供に微笑みかけます。

その姿はまるで、ろうそくが燃え尽きる前に勢いを増した灯火のようで、儚く美しい光景でした。

その数週間後。

彼女——冬川 陽奈乃の命の灯火は燃え尽きました。

自分の子供の名前を遺して……。

その子の名は、『優希』。

「……そんな……！」

鹿島さんの話に僕は愕然とした。

その話が本当なら、僕の産みの親は、僕を産んだことによってその命を削った事になる。

僕は、僕のせいで……親は死んでしまった。

僕なんかのせいで……！

「冬川……泣いて——」

「——ません！」

くそ、どうして勝手に目から涙なんか出てくるんだ。

「……その後、陽奈乃の両親……優希くんにとって祖父母が孤児院に優希くんを預けました。これは一時的なもので自分たちの心の整理がついたら引き取るつもりだったそうです。しかし、自分たちが引き取るうとしたら……」

「既によそに引き取られていた……ってことですか」

つまり、僕は捨てられた訳ではない。

確かに、自分の子が亡くなり、しかもその子供が発端のことも知らぬ男との子供で、その子供を産んだが為に命を縮めたとなると、心の整理がいるだろう。

そのためには、全ての象徴である子供から一度離れるのも仕方がない。

「幸せに生活するなら、それならいい。そう思って祖父母は諦めた

そうですが、昨日養子縁組みが解消されたことが分かり、調査を兼ねて私が来たわけですよ」

ここで一旦話に区切りをつけ、鹿島さんは既に置かれていたコーヒーを一口飲んだ。

「実は、私は陽奈乃とは友達同士だったんです。あの時、遊ぶ約束をしていたのも私ですよ」

「……………」

「私のせいだと悔やみ、そして罪に問われなかった男が憎くて、もうこんな人は生み出さないと思って、私は弁護士になったんです」

鹿島さんは、ビジネスバックの中から、クリップで留められた資料を幾つか出した。

「優希くんの養子先の家庭を調べてみたんです。そしたら、とんでもないことが分かったんですよ」

そう言つて、鹿島さんは一つの資料を手渡してきた。

長谷部と一緒に覗き込む。

そこには、男の顔写真が印刷されていた。

残っている面影から、若き日の長澤の父親様だと分かった。

「これって……………」

「長澤 俊雄。会社員。当時、妻子持ちにも関わらず、冬川 陽奈乃を犯して孕ました張本人」

あまりのショックから、頭がくらつとして、思わず倒れそうになった。

咄嗟に、長谷部が支えてくれなければ、本当に倒れていたかもしれない

ない。

それ程、僕に与えた衝撃は凄まじいものだった。
つまり僕は、自分の母親を犯した男にこき使われていたということなのか。

「はははっ……」

「冬川？」

何たる道化。

愚かすぎて笑える。

しかもだ。実際にあの糞兄貴とは腹違いの兄弟だということになる。

「偶然が生んだ皮肉か、それとも知った上で引き取ったのかは知りません。ですが、長澤 俊雄は自分が犯した時に出来た子供と知っていたようです。優希くと話す前に、長澤家を訪れて聞きました。」

「……………」

「その奥さんも知ってましたよ。酷く優希くんを嫌ってましたが……」

「……………そうでしょうね」

でなきゃ、あんな生活を送ることはなかった。

「新婚まもない時に、夫が強姦して作った子供ですから……憎かったんでしょうね……………」

誰もが黙りこみ、しんみりとした空気が店内を支配した。

長谷部もこの重い空気に、パフェを食べることができずにいる。

「冬川に戻ってきませんか？」

「えっ」

「私はそうすべきだと思いますし、優希くんの祖父母はそう望んでいます」

祖父母……。

まだ見たことのない人たち。

「ですが、それは優希くん自身が決めることです。今すぐとは言いません。ゆっくりお決めください」

僕は……どうすればいいのだろう。

いつまでも佐山家に居るわけにもいかない。迷惑になる。そうなると、僕は冬川家に行った方がいいのかもしれない。

「部外者が少し聞くけど、冬川家はどこにあるのかな？」

今まで蚊帳の外だった長谷部が口を開く。

「城崎です」

「城崎……！全くの逆方向じゃないか」

長谷部が驚くのも無理はない。長谷部が住む姫井市は太平洋側の市街地。そして、城崎は日本海沿岸の街だ。位置が全く違う。

もし、冬川家に行くことになったら転校することは避けられない。そうなると、長谷部や佐山とも会うことはなくなるかもしれない。

「……優希さん。一度、陽奈乃のお墓参りをしませんか」

「お墓参り……」

「これは私の我が儘な願いでもあります。どうか、お願いします」

そう言つて、鹿島さんは僕に頭を下げた。

「あの……頭をあげてください。お墓参りは、ぜひ僕も行きたいですから」

「……ありがとう」

鹿島さんは目に少し涙を浮かべていた。

生前、余程仲が良かったことが分かった。

「ついでに冬川の祖父母に会ってくれませんか」

「……いいですよ」

鹿島さんはメモ帳に何か書き込んでいく。

「では、私の電話番号を渡しておきます。都合のいい日が決まりましたら、ご連絡ください」

鹿島さんにメモを渡される。

産みの母親……。

僕は、産みの母親のお墓に行つて何を感じるのだろうか。

十一話（後書き）

次話が一区切りがつくので最後の予定です。
その後は番外編を二話程度予定しています。

最終話

夏。

学校は夏休みに入って、今は丁度お盆休みの頃だ。

僕は自分の母親が眠る霊園に来ていた。

本当はもっと早くに来たかったのだけど、僕自身の心の準備に時間が掛かった。

丁度靈魂が現世に帰ってくるというお盆だし、いいタイミングなんじゃないかと思っている。

でも、僕は幽霊とかは信じていない。

別に怖いとかじゃない。ただ、非現実的で非科学的なことが信じることができないからだ。

断じて、幽霊とかお化けとかが怖いわけではない。

断じて！ 怖いわけではない！

ぴとっ。

「ぴああああ！！」

突如として襲ってきた冷たい感触。

何か、何かが頬に！

冷たくて何か弾力があるものが僕の頬に！

僕は慌てて振り返ると、そこにはこんにゃくを持ってニヤニヤといやらしく笑う長谷部がいた。

先ほどの感触の正体。その手に持つこんにゃくか！

「何するんですか！」

「やはり、墓場に来たら肝試しだろう。そして、肝試しと言えばこ

んにゃくは定番だろう!」

胸を張って言うことではないだろう。

「今はお昼です! 意味ないことしないでください!」

「ふっ……君の可愛い叫び声だけで十分意味あることだったよ」

もう殴っていいよね? この変態。

僕は思わず振り抜きそうになる右手を抑える。

その時、僕の肩に柔らかな重みが掛かった。

「長谷部さん。あまりゆー君にちょっかい出さないでください」

僕の肩から、佐山がのしかかるようにして顔を出していた。

密着しすぎて、背中に何やら柔らかな感触を感じる。

「君こそ密着しすぎじゃないかな?」

「幼なじみだからいいんです」

という理論だそれは。

「第一、君には彼氏がいるんじゃないのかな? ほら、週刊誌にすっぱ抜かれたじゃないか」

「あれは違います。交際を求められたからフットんです」

つい最近、佐山は週刊誌に熱愛記事を掲載された。それは、あの糞兄貴が佐山に抱き付いたところを撮った写真だった。

しかし、佐山が後日会った話によると、糞兄貴に交際を迫られて、それを断ったら抱きつかれたて更にしつこく迫り、身の危険を感じたので、近くの生徒に助けを求めたとのこと。

実際、その週刊誌の写真は、本来なら関係者以外は入れないはずの校内で撮られており、記者が不法侵入して隠し撮りしたのでないかと、今は週刊誌が叩かれている。

あの糞兄貴も、この佐山の会場でハーレム要員達に愛想を尽かされ、学校で肩身が狭くなったようだ。

ところで、この二人が何故ここにいるかというところ、このことを知った二人ともが、ついて来ると行つて聞かなかったからだ。

結局、僕が鹿島さんに頼んで、追加で連れて行ってもらったのだ。

「……陽奈乃のお墓はこの先です」

「……はい」

僕は、肩にのしかかる佐山を振り解き、道中の花屋で買ってきていた花束を持つ。

後は線香とろうそくとマッチだ。

そして歩き出そうとして、思い出す。

「……あの」

そうだった。

僕は、この時を決めていたのだった。

「お墓参りは僕一人で行かせてください」

●

僕の母さんの墓は、霊園から少し離れたところにあった。

高台になっていて、街が一望出来るところだ。蒼い海も見える。海から吹く風が頬を撫でる。磯の匂いがした。

「……………」

これが、母さんの墓。

僕は花を手向けると、墓石に水を掛けて軽く拭いた後、ろうそくに火をつけて、線香を上げる。

正しいお墓参りなんて分からない。だけど、これでいいと思う。

僕は静かに手を合わせて、祈った。

——初めて、母さん。

今、僕はあなたのお墓参りをしています。

僕は、母さんがどんな人だったのかは知りません。

僕は母さんのことを覚えていないし、何も知りません。

それでも、僕はあなたのお墓参りをしています。

今まで僕は捨てられた要らない存在だと思っていました。

でも、違った。

僕は捨てられた訳じゃなかった。

運とタイミングが悪かっただけ。捨てるつもりはなかった。

それが分かったただけでも、僕にはとても嬉しかったんだ。

……僕は……。

●

ここは、どこだろう。

まるで、実体がないように体がフワフワしている気がする。
水面に漂っているようだ。

気がつくと、僕はどこかの部屋の中にいた。

僕は何をしていたのだろう。

ふと、潮の香りを含む風が頬を撫でた。

窓が開いている。

いや、気付けば誰がいる。ベッドに誰がいる。

意識がはつきりしてくるに連れて、段々と周りが認識出来るようになってきた。

ベッドにいるのは少女た。その周りには、同じ歳くらいの少女と、
医師と看護師。両親らしき人がいた。

ここは、病院だ。

「……ねえ、ホントに産むの？」

ベッドにいる少女に、同じ歳くらいの少女……多分、友人であろう
人がいう。

その友人は目が赤く腫れぼったくっており、大分泣きはらしたこ
とが分かった。

少女は優しく微笑むと、そんな友人の頭をくしゃりと撫でた。

「うん。そのつもり」

「でも！ その子はある時襲われた——」

「分かってる」

「だったら——」

「でもね……」

少女は愛おしそうに、僅かに膨らんだお腹を撫でた。

「この子には何の罪もないの。それに、この子は私を選んでくれた。だから産むの」

「そんなの……分かるけど……分かんないよ……!」

また泣き出した友人の背中を優しくさする。

「……ありがとう楓。私の代わりに泣いてくれて」

「そんなことないよ……」

「よしよし」

ぐにやりと今見ていた光景が変わった。

そしてまた別の光景となる。

景色が変わっていた。

窓の奥には雪がチラツいているのが分かった。

少女はまだベッドの上にいた。周りを前と同じ人たちが取り囲んでいる。

季節が変わっただけで、何も変わらないように見えた。でも、違った。

少女は酷く血色が悪くなっていた。口元には、呼吸を助ける酸素マスクが付けられていた。

直感的に、もう長くはないことが分かった。

自分でも分かっているはずなのに、少女はそれでも穏やかに、優しい笑みを浮かべていた。

少女の腕の中には、赤ちゃんが眠っていた。

「寝ちゃった」

少女は、自分の腕の中で眠る赤ちゃんに微笑みかける。ふと、少女は友人と両親に手招きした。

ゆっくりと少女に顔を近付けた。

「あのね。私、この子の名前決めたの」

穏やかに微笑んだ。友人も微笑み返そうとするが、涙でどうしても微笑むことができない。

そんな友人に、少女は優しく頭を撫でた。

「泣かないで。お願い」

「……うん」

少女は満足したように優しく笑う。

「それでね。この子の名前は……優希。色んなことがある世の中だけど、優しく、希望を持って育って欲しいから……だから優希」

「……いい名前ね」

「ああ、いい名前だ」

「ありがとう。母さん、父さん」

少女は嬉しそうに笑った。

そんな少女を見て、両親は複雑そうな笑顔を浮かべる。

母親は少女から顔を背けて、静かに泣き出した。

「……楓、この子のこと、見守ってあげて」

「うん……分かった」

「あと、もう一つお願い」

少女は力なくウインクをした。

「この子が大きくなったらね。一度でいいから私のお気に入りの中場

所に連れてきて。お願い」

「うん」

「ありがとう」

少女は安心したように、穏やかな表情で目を閉じた。

「……眠くなっちゃった。そろそろ逝くね。優希のこと、お願いね

——……」

最後にそう言い残して……。

僕は、その時これが夢だと気付いた。

その瞬間、急激に意識が覚醒した。

●

酷く悲しい夢を見た。

起きたら移動中の鹿島さんの車の中だった。

時計を見ると、ちよつと眠ってしまったみたいだ。

「……あ」

そこで知らぬまに、僕が涙を流していた気づいた。

「あの、鹿島さん。どこに向かっているんですか？」

僕は気になっていたことを聞いた。

でも、どことはわからないけど、何となく分かっている気がした。

「陽奈乃が好きだった場所です」

「それは……どこですか」
「……………」

鹿島さんは黙って何も言わなかった。

車は山を登っていく。

しばらく走ると、そこは山の上にある天文台だった。

「……この天文台の、海を見渡せる展望が陽奈乃のお気に入りだったの」

そうなんだ……。

ここには、何があるのだろう。

母さんは何を想って、何を見ていたのか。

この蒼い海が一望できる景色を見れば、分かるだろうか……。

●

まただ。

僕はまた夢を見ていた。

そこはさっきまでいたあの天文台で、一人の少女が立っている。

僕は、その少女に見覚えがあった。

病院のベッドの上にいたその人。よく見れば、僕の顔にそっくりだった。

やっぱり、この人は僕の……。

「こんにちは」

「あつと、こんにちは」

少女は朗らかに微笑みを浮かべていた。

何だか気恥ずかしい。

「はじめまして……じゃないけど、それでいいかな。私は冬川 陽奈乃、君のお母さんだよ」

「……冬川 優希です」

「うん。知ってる」

それもそうかと、不思議と夢の中で納得してしまった。

夢のはずなのに、律儀に潮風が吹く。

母さんはニコニコと笑みを浮かべながら、僕に近付いてくると、僕の頭に手を乗せて身長を較べた。

小柄な僕だけど、較べたら僕の方が身長は高かった。

きつと、小柄なのは遺伝子だろう。

「身長。抜かれちゃたね」

微笑みを浮かべつつも、どこか寂しそうだった。

「そっか、成長しているんだね。そうだよな。もう、歳だって私を抜いちゃうもんね……」

確か、母さんが僕を産んだのが15か16。今の僕と同じ時だ。

今、目の前にいる母さんは、死んだ時から変わらないまま。同年齢なんだ。

「嬉しいけど……やっぱり寂しいな。成長していく姿が見れなくて」

僕はくしゃりと母さんに頭を撫でられた。

夢の癖に、その感触がリアルで、温かくて……涙が出てきそうになる。

「ちゃんと、私が想った通りに育ってくれたんだね」
「……そんなことはないですよ」

僕は名前を付けられたら意味のように優しくはない。
僕は名前を付けられたように希望を持たなかった。

何度となく死んでやろうとも思ったし、みんなからは嫌われている。
僕は……裏切ったんだ。

「僕は……嫌われ者なんです。母さんの想うような人間じゃありません。僕は……母さんの期待を裏切ったんです」

母さんはしばらくポカンとして、嬉しそうにクスクスと笑って……
僕を抱き締めた。

「……やっぱり、私が願った通りに優しい子だね」
「——そんなこと」

ない、という前に母さんは僕の言葉を遮る。

「だって、泣いてるじゃない」

そこで初めて、僕は自分が涙を流していることに気がついた。

「私が願った通りの人間じゃないと思って、悔しくて、悲しくて、
申し訳なくて……泣いているんでしょ？ 他人の願いの為に泣いて
いるんでしょ？ 優しいよ。私の子は」

違う……いや、違わないかもしれないけど、もう心がごっちゃで、
嬉しくて、悲しくて、恥ずかしくて……もう分からない。

ただ、僕は母さんに抱き締められて、その腕の中で涙を流していた。

「僕は……僕は……！」

「よしよし。私は嬉しいんだよ？だから泣かないで」

「でも……僕は……母さんが願った人間じゃ……！」

「……結構強情だね」

まあ、私もただどねと、母さんは笑う。

そして、母さんは僕を離れた。

「どうしてそんなに自分を過小評価するかなあ？」

「だって、僕は除け者にされて、ずっと一人でした。ずっと、一人の世界にいました。僕には誰も……」

「うーん、そうかなあ？」

パチンツと母さんが指を鳴らした。

すると、二人の少女の姿が現れる。

長谷部と佐山だ。

二人とも眠っているようで、宙を浮かんでいた。

「今は、一人なんかじゃないでしょ。今のキミの世界にはこの二人がいる」

「……確かに、そうかもしれません。でも、もうすぐ長谷部も佐山も、僕の前から去っていかかもしれません」

実際、佐山は一度僕の前から消えた。

他にも、僕を裏切ったりして去っていった人は何人もいる。

だから、僕は一人の世界に入った。

「……怖いんです。大切なものが去っていくのが。信じた人に裏切られるのが……。もう、そんな目に遭いたくないんです」

僕の言葉に、母さんは悲しそうに少し目を伏せた。

母さん自身が、僕の前から去ってしまったことに罪悪感を覚えていたのだろう。でも、事情を知った僕は母さんを恨んじやない。

「……ごめんね」

「僕は母さんの事を言ったんじゃないです。それに……僕は恨んでませんよ」

「……ありがとう。やっぱり優しい子だよ」

「……………」

「それにね。あの二人は信じていいと私は思うよ。ううん、確信してる」

どうして、そんなことが言えるのか。分からない。

「だって、二人はキミの事を信頼しているみたいだし……気にしているんだもん。じゃなきゃ、こんな所まで着いてこないよ。きっと気があるんだね」

「……信頼されているんですか、僕」

何を信頼されているのか甚だ疑問だけど。

相手が僕を信じているのなら、僕はその相手を信じることが出来るだろうか。

「親の言うことは聞くものだよ」

「……分かりました」

信じよう。二人を。

長谷部と佐山を。

抜け出そう。

一人の世界を。

「うんうん。それでいいよ。是非とも、二人には頑張っ
て欲しいものだね」

母さんは、宙に浮かび眠る二人にウインクを送った。

「私の子は、ニブチンだから、諦めちゃ駄目だよ？」

そう言っ
て、母さんはまた指を鳴らした。
すると、二人の姿は消えた。

「もうすぐ時間だね」

母さんは、病院で赤ちゃんの僕に浮かべたような穏やか笑顔だった。
周りの景色が次第に薄く、白くなっていく。
もう、覚醒が近いようだ。

「……楓にありがとっ
て伝えてね」
「はい」

そして最後に、母さんは僕を抱き締めた。

「ずっと……見守っているからね……」

その母さんの声を聞いて、僕は夢の世界から現実に戻った。

●

「起きましたか」

目が覚めたら、既に佐山の家の前に車は着いていた。
鹿島さんが少し心配そうに運転席から覗いていた。

「ずっと寝ていたんで心配しましたよ。調子悪いんですか？」

「……いえ、大丈夫です」

「そうですか。ならいいです」

僕は鹿島さんの車から降りる。

鹿島さんはパワーウィンドウを開けて、顔を出した。

「今回は、冬川家に行きませんでした。また後日にでも」

「そのことですけど……——」

僕は決めた。

エピソード

僕は、母さんのお墓参りをした次の日。僕は佐山の家を出た。佐山の両親には、理由を言っただけ、佐山には言わなかった。長谷部にも、何の連絡を入れなかった。

二人に言わなかったのは訳がある。十中八九。僕を止めようとするからだ。だから、僕は言わなかった。

冬川家に行くことを。

夏休みの間。僕は冬川家で過ごした。

祖父母ともいい人で、おじいちゃんおばあちゃんと言ったら怒られた。そんな歳じゃないだろうだ。

父さん母さんと呼べって言われたけど、僕にとって母さんは産みの母さんでしかないの、お袋ということになった。

ついでに父さんのことを親父と呼ぼうとしたら、凄く嫌がられた。

冬川家では、母さんのことを聞いたり、アルバムを見たりした。

家の近くを散策したり、海で泳いだりもした。

でも……やっぱり何か物足りなかった。

夏休みが終わる頃、僕は両親にあることを打ち明けた。

すると、両親は驚いたようだけど、快く了承してくれた。

そして今、僕はここにいる。

●
時間は夜。

始業式だったはずの今日。この時間なら揃っているはずだ。

「……ただいま」

そう言つて開けた佐山家の玄関。

佐山の両親には事前に言っている。

きっと待っていることだろう。

そしてリビングに続くドアを開けると、

「——ゆー君!？」

案の定、僕を見て驚いている佐山の姿があつた。

慌てる佐山の姿に、佐山の両親は笑っている。

「やつときたな」

「待つてたわよ」

「はい、よろしくお願いします」

えっえっ、とまだ事態をうまく飲み込めていない佐山を放置して、勝手に話を進める。

「ど、どうしてゆー君が? 城崎の方に引越したんじゃ……」

「ええ、そうですよ」

「じゃあなんで?」

なんで……か。

確かにそう思うだろう。

僕だって、どうしてこつもまどろっこしいことをしているのか分からない。

「転校はしてないんですよ」

「……………」

「だから、城崎から通うには遠すぎる。そこで、こつちで下宿することになったんですよ」

「それって——」

そう、何も変わらない。

冬川家に戻り、こつちで過ごす為にはこうするしか手はなかった。

僕は、このことを両親に許しを得る為に夏休みを冬川家で過ごしたのだ。

「……………ゆー君」

「はい」

「おかえり——！」

佐山は僕の胸に飛び込んだ。

●

朝。

僕は学校にいた。

時間的にもまだ早い。

僕の足は自然と文芸部の部室に向かっていた。

「……………」

誰かがいる。

僕はそつとドアを開いた。

そこには、長谷部とその幼なじみがいた。

長谷部は机に突っ伏している。

二人とも、僕には気付いていない。

「いい加減立ち直りなあれよ」

「無理」

「別にいいじゃねえか、あんな奴。城崎の方に行つたんだろ」

「うう……」

「でも、転校したって話はねえんだよな。不思議なことに」

そこで、ふと長谷部の幼なじみと目が合う。

「あ、お前」

「……どうも」

僕の声聞いて、長谷部はバツと顔を上げた。

そして僕の顔を確認すると、長谷部は顔をくしゃくしゃにして、泣いて僕に飛び込んできた。

「あわわっ」

泣き声が思ったより大きくてびっくりした。

こんな光景、対外的に見られると厄介なので、部屋に入る。

僕の胸の中で泣きじゃくる長谷部の頭を、落ち着くように優しいなでてあげる。

そんな姿を、長谷部の幼なじみは珍しそうに見ていた。

「お前、何か丸くなつたな」

「……太つてませんよ」

「違う違う。性格がだよ。前までは誰も寄せ付けない刃物だった」
「そうですかねえ……」

きつと、心にゆとりが出来たからだろう。

前までは自分のことで手一杯だったけど、今は違う。
自然と、顔に笑みが浮かんだ。

「いいじゃねえか。今まで笑った所なんて見たことがないからな。
いい笑顔だよ」

「そうですか」

「ああ、親しみやすくなった」

何だか少し恥ずかしい。

すると、今まで泣いていた長谷部は泣き止んで、僕の制服の袖をキ
ュツと握ったかと思うと、幼なじみに向かって言った。

「私のだ。あげない」

若干、幼児退化している長谷部を幼なじみは笑う。

「取らねー取らねー」

全く、僕は誰の物じゃない。僕は僕の物だ。

「にしても、まるで母親と子供だな」

状況的に考えると、僕が母親で長谷部が子供となる。
でも、せめて、父親と言って欲しかった。

「……冬川」

長谷部は泣き止み、僕から離れる。

「おかえり……待っていた」

「はい、ただいま」

涙が残っていたけど、長谷部は僕に笑いかけた。

●

最近、僕はふと考えたことがある。

それはとても幸せで有り得ない光景。

母さんが生きていて、僕は小さな一軒家に一緒に暮らしている。

佐山は昔みたいに僕の太陽で、笑顔を振りまいていて、学校では長谷部と他愛のないことを話す。

誰からもイジメられることなく、笑って過ごす。

一人じゃない世界。

そんな世界は、あまりに楽しくて楽しくて、そして幸せすぎて、僕はただの想像で泣いてしまいそうになった。

それでも僕は、この想像した幸せな世界に、一歩近付いたと思っている。

「冬川」

「ゆー君」

母さんはいないけど、僕の世界にはこの二人がいてくれる。
いつ壊れるか分からない世界だけど、それでも僕はこの世界が大切だ。

「二人とも」

「なに？」

「なんだい？」

僕の先を歩いていた二人が振り返る。

二人共笑顔で、その笑顔があまりに眩しすぎて、幻想なんじゃないかと思えた。

……大丈夫。

もう、僕は一人の世界にいた僕じゃない。

「楽しいね、誰かといるのは」

「あつたり前！」

「当たり前だよ！」

言い方は違うけど、二人とも同じ言葉を言った。

そう大丈夫。色々あつたし、これからも色々あるだろうけど、それでも僕は大丈夫。

少なくとも、壊れやすい子の世界で大切なものは目の前にある。

現実、僕の想像に負けないくらい醜くも美しい。

僕はそんな世界で生きて笑って暮らしていく。

もう、一人じゃない。

今は誰かという楽しい世界。

ああ、笑うつていいな！楽しいな！

I LOVE SMILE!

I LOVE MY WORLD!

《LONELY WORLD》
is HAPPY
contin

uing!

エピローグ（後書き）

このたびは、この小説を読んいただきありがとうございます。
この場でお礼申し上げます。

中盤、本来なら書くべき話をかつ飛ばしたことをここで謝罪します。
本当なら、佐山は中盤嫉妬深い要素が出るはずでした。そのつもり
でした。

正直、忘れてました。

予定では、佐山が長谷部と優希のデートを目撃、追跡途中に嫉妬し
まくるという流れで、その後、佐山ともデートしてそれをあの兄貴
が目撃し、家を追い出されるはずでした。

終盤では泣ければと思って書きました。どうなるうが知りません。
ヤケです。

感想を頂いた中で、長澤家に正義の鉄槌を——！的な話を頂きました
が、その長澤家にもやむを得ない（？）意味あいをもたせたつも
りです。

勘弁してあげてください。

あの兄貴をフられたことですし……。

番外編を書くかもしれませんが、また何らかの形で自分の小説を読
んでいただければと思います。

それでは皆様、このたびはありがとうございました。

月見
岳

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5200o/>

一人のセカイ

2011年2月24日12時56分発行